北杜市埋蔵文化財調査報告　第12集

山梨県北杜市

# 梅之木遺跡（うめのきいせき）V

縄文時代中期の集落遺跡の平成17年度確認調査概要報告書

2006

北杜市教育委員会

北杜市埋蔵文化財調査報告　第12集

山梨県北杜市

# 梅之木遺跡（うめのきいせき）V

縄文時代中期の集落遺跡の平成17年度確認調査概要報告書

2006

北杜市教育委員会

# 例　言

1　本書は、山梨県北杜市明野町浅尾字梅之木に所在する梅之木（うめのき）遺跡の平成17年度確認緊急調査の概要報告書である。平成16年度調査の概要報告書「梅之木遺跡Ⅳ」は既刊である。

2　本確認調査の現地作業は、平成17年6月6日に着手し、平成18年3月31日に完了した。調査記録と出土品の整理作業は、平成17年4月1日に着手し、平成18年3月31日に完了した。

3　確認調査は、遺跡の主体である縄文時代中期後半の環状集落の性格確認を目的として、国庫補助金、県費補助金の交付を受けて、実施した。

4　確認調査は北杜市教育委員会が直営で実施した。調査組織は下記のとおりである。

調査主体　北杜市教育委員会教育長　小清水淳三
調査担当　北杜市教育委員会生涯学習課文化財担当　主査　佐野隆
調査事務局　北杜市教育委員会生涯学習課

5　確認調査の学術的な水準を確保するために、梅之木遺跡確認緊急調査指導委員会を組織し、調査に関する指導助言を受けた。組織は下記のとおりである。

委員長　谷口一夫（山梨県考古学協会会長）
副委員長　十菱駿武（山梨学院大学教授・考古学）
委　員　小林達雄（國學院大學教授・考古学）
委　員　長沢宏昌（山梨県考古学協会会員）
委　員　山本暉久（昭和女子大学教授・考古学）
参　与　新津　健（山梨県教育委員会学術文化財課文化財指導監）
参　与　末木　健（山梨県埋蔵文化財センター調査課長）

6　本書の執筆、編集は、佐野があたった。

7　本遺跡の出土品及び調査に係わる諸記録は、北杜市埋蔵文化財センターが保管している。

8　確認調査の実施にあたって以下の方々と機関に、ご協力とご指導を賜った。ご芳名を記して感謝したい（五十音順・敬称略）。

北杜市浅尾原財産区、茅ヶ岳土地改良区、峡北地域振興局農務部、昭和女子大学、北杜市穂足財産区、文化庁、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県森林環境部環境整備課、財団法人山梨県環境整備事業団、山梨県埋蔵文化財センター、阿部祥人、安藤広道、今福利恵、植月学、閏間俊明、岡田康博、櫛原功一、小宮山隆、小林謙一、桜井準也、佐藤孝雄、椎名慎太郎、田中洋二郎、深沢正子、村本周三、三田村美彦、山口徹、領塚正浩、渡辺誠

9　調査参加者（五十音順・敬称略）

秋山高之助、浅原友子、厚芝金夫、石渡節子、井手研二、井手正美、伊東加代子、井上町子、長田重子、小澤久恵、小野一英、小野芳江、柏木恵美、片山和江、金子仁香、兼松章子、上村ゆきえ、河西利浩、小松原千津、清水貞子、清水里子、清水さゆり、清水　尋、清水やす子、清水泰倫、清水裕子、下島綾美、鈴木節夫、田中公代、千葉毅、筒井つや子、筒井菜津子、手塚松雄、中込幸子、沼田晃佑、野崎美智江、長谷川規愛、樋口妙子、深谷俊祐、藤原喜美子、藤本愛、平島勝、水上勝美、水上浩之、水口純一、三澤庸平、三井照平、三井喜満、三井つや子、皆川由紀子、皆川禮子、宮川昌蔵、望月誠、山田雅子、八巻まさ子、横内勝太、米山由美子

# 凡　例

1　報告書中の地図は、国土地理院発行２万５千分の１地形図「若神子」「韮崎」、５万分の１地形図「八ヶ岳」「韮崎」「鰍沢」「金峰山」「御岳昇仙峡」「甲府」、山梨県峡北地域振興局農務部作成「梅之木遺跡地形現況平面図」、財団法人山梨県環境整備事業団作成「明野最終処分場用地現況地形図」、明野村役場「明野村全図」、北杜市役所「北杜市全図」を使用した。

2　図版の遺構埋土色及び土器胎土色は、『新版標準土色帖』財団法人日本色彩研究所に拠った。

# 本文目次

例言・凡例
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査の経緯と目的 …… 1
第２章　確認調査の方法と成果の概要 …… 9
　第１節　竪穴住居の調査 …… 9
　第２節　土坑の調査 …… 11
　第３節　集落範囲の確認調査 …… 11
第３章　調査の結果と課題 …… 14

# 表目次

第１表　遺跡地名表 …… 4

# 図版目次

第 1 図　梅ノ木遺跡と周辺の縄文時代遺跡 …… 3
第 2 図　調査地点図 …… 5
第 3 図　調査地点詳細図 …… 6
第 4 図　調査遺構・試掘溝位置図 …… 7
第 5 図　試掘溝位置図 …… 8
第 6 図　14 号・18 号住居 …… 16
第 7 図　出土遺物 …… 17
第 8 図　92 号住居・出土遺物 …… 18
第 9 図　111 号住居 1452 号ピット 出土遺物 …… 19
第 10 図　156 号住居 …… 20
第 11 図　出土遺物 …… 21
第 12 図　道路状遺構位置図 …… 22
第 13 図　TR-23、TR-2 出土遺物 …… 23
第 14 図　TR-3、TR-4 出土遺物 …… 24
第 15 図　TR-22、TR-5、TR-9 出土遺物 …… 25
第 16 図　TR-10、TR-6、TR-11 出土遺物 …… 26
第 17 図　TR-12、TR-7 出土遺物 …… 27
第 18 図　川岸の遺構位置図 …… 28
第 19 図　TR-19、敷石遺構 出土遺物 …… 29
第 20 図　TR-17 出土遺物 …… 30
第 21 図　TR-16 出土遺物 …… 31
第 22 図　TR-13 1 号集石 出土遺物 …… 32
第 23 図　TR-14 1 号焼土 出土遺物 …… 33
第 24 図　TR-15 出土遺物 …… 34
第 25 図　TR-18 1 号～ 4 号土坑 出土遺物 …… 35
第 26 図　TR-20 出土遺物 …… 36
第 27 図　TR-21、TR-24、TR-25 出土遺物 …… 37
第 28 図　TR-26 出土遺物 …… 38
第 29 図　TR-35 出土遺物 …… 39
第 30 図　TR-34 出土遺物 …… 40
第 31 図　TR-33 1 号、2 号土坑 …… 41
第 32 図　TR-27、TR-28、TR-29 出土遺物 …… 42
第 33 図　2 号集石 TR-30、TR-32、TR-31 …… 43
第 34 図　試掘坑の出土遺物 …… 44

# 写真図版目次

写真図版 1　梅之木遺跡遠景 …… 45
　梅之木遺跡俯瞰写真 …… 45
写真図版 2　９２号住居 …… 46
　９２号住居 …… 46
写真図版 3　１１１号住居 …… 47
　１１１号住居柱穴付近の土偶出土状況　47
写真図版 4　５５号住居 …… 48
　５５号住居柱穴 …… 48
写真図版 5　１４号住居 …… 49
　１８号住居 …… 49
写真図版 6　１８号住居 …… 50
　１８号住居出入口の立石 …… 50
写真図版 7　１５６号住居 …… 51
　１５６号住居 …… 51
写真図版 8　１５６号住居 …… 52
　１０号住居 …… 52
写真図版 9　集落北側の斜面 …… 53
　6 号試掘溝 …… 53
写真図版 10　2 号試掘溝 …… 54
　3 号試掘溝 …… 54
写真図版 11　4 号試掘溝 …… 55
　5 号試掘溝 …… 55
写真図版 12　6 号試掘溝 …… 56
　7 号試掘溝 …… 56
写真図版 13　9 号試掘溝 …… 57
　10 号試掘溝 …… 57
写真図版 14　10 号試掘溝 …… 58
　11 号試掘溝 …… 58
写真図版 15　12 号試掘溝 …… 59
　22 号試掘溝 …… 59
写真図版 16　23 号試掘溝 …… 60
　湯沢川の現況 …… 60
写真図版 17　湯沢川の現況 …… 61
　13 号試掘溝 …… 61
写真図版 18　13 号試掘溝の集石土坑 …… 62
　14 号試掘溝 …… 62
写真図版 19　14 号試掘溝の焼土跡 …… 63
　15 号試掘溝 …… 63
写真図版 20　15 号試掘溝遺物出土状況 …… 64
　16 号試掘溝 …… 64
写真図版 21　17 号試掘溝 …… 65
　18 号試掘溝 …… 65
写真図版 22　18 号試掘溝の土坑検出状況 …… 66
　19 号試掘溝 …… 66
写真図版 23　19 号試掘溝の敷石遺構 …… 67
　20 号試掘溝 …… 67
写真図版 24　21 号試掘溝 …… 68
　24 号試掘溝 …… 68
写真図版 25　25 号試掘溝 …… 69
　26 号試掘溝 …… 69
写真図版 26　27・28・29 号試掘溝 …… 70
　29 号試掘溝の集石 …… 70
写真図版 27　30 号試掘溝 …… 71
　31 号試掘溝 …… 71
写真図版 28　32 号試掘溝 …… 72
　33 号試掘溝 …… 72
写真図版 29　33 号試掘溝の土坑検出状況 …… 73
　34 号試掘溝 …… 73
写真図版 30　34 号試掘溝 …… 74
　35 号試掘溝 …… 74
写真図版 31　平安時代の住居跡を確認した試掘坑　75
　作業風景 …… 75
　調査指導委員会の現地視察 …… 75
　平成 17 年度調査の見学会 …… 75
写真図版 32　梅之木遺跡からみた八ヶ岳 …… 76
　梅之木遺跡からみた南アルプスの山並み …… 76

# 第１章　調査の経緯

## 第１節　調査の経緯と目的

平成 17 年度の梅之木遺跡確認緊急調査までに至る経緯と目的は、既刊の平成 16 年度確認調査概要報告書『梅之木遺跡Ⅳ』に詳細に報告してあるため、ここでは、これまでの経緯の概略を記すにとどめ、平成１７年度確認調査の目的を記したい。

周知の埋蔵文化財包蔵地「梅之木遺跡」は、縄文時代中期の集落跡として知られていたが、山梨県峡北土地改良事務所が施行する明野地区県営畑地帯総合整備事業に伴い、平成 15 年度に記録保存のための発掘調査を実施した。この調査において、梅之木遺跡は縄文時代中期後半（曽利式期）の環状集落が良好に保存されていることが判明し、事業者と明野村教育委員会（当時）とで協議した結果、事業と記録保存のための発掘調査は一時中断し、遺跡の文化財的価値、性格を詳細に確認する調査を、文化財行政側の経費負担で実施することとした。こうして平成 16 年度から平成 19 年度までの４ヵ年計画で、梅之木遺跡確認緊急調査を実施することとした。この間、文化庁、山梨県教育委員会から指導助言を得た。

確認調査は、国庫補助金、山梨県文化財関係補助金の交付を受けて実施することとした。平成 17 年度確認調査経費は 23,645,312 円で、補助金及び文化財保護法等に係わる事務手続きは、以下のとおりである。

| | |
|---|---|
| 国庫補助金交付申請 | 平成 17 年４月 18 日付北杜生学第 79 号 |
| 国庫補助金交付決定通知 | 平成 17 年６月　１日付 17 庁財第 51 号 |
| 県費補助金交付申請 | 平成 17 年７月　４日付北杜生学第 468-1 号 |
| 文化財保護法第 99 条による報告 | 平成 17 年７月 29 日付北杜生学第 650 号 |
| 県費補助金交付決定通知 | 平成 17 年９月 14 日付教学文第 688 号 -3 |
| 国庫補助事業実績報告 | 平成 18 年４月　４日付北杜生学第 33 号（以下、見込み） |
| 県費補助事業実績報告 | 平成 18 年４月　４日付北杜生学第 27 号 |
| 発掘調査終了報告 | 平成 18 年４月 18 日付北杜生学第 102-4 号 |
| 埋蔵物発見届 | 平成 18 年４月 18 日付北杜生学第 102-1 号 |
| 埋蔵物保管請証 | 平成 18 年４月 18 日付北杜生学第 102-3 号 |
| 埋蔵文化財保管証 | 平成 18 年４月 18 日付北杜生学第 102-2 号 |

平成 16 年度確認調査は、主に竪穴住居等が環状に分布する、いわゆる環状集落本体の分布範囲を確認するとともに、竪穴住居２軒を発掘調査し、調査方法の検討・確認を行った。あわせて周辺地形環境の生成過程の分析を委託実施した。これらの調査を適切に実施し、学術的水準を確保するために、梅之木遺跡確認緊急調査指導委員会を組織し、調査方法、調査成果について指導助言、評価を頂くこととした。

平成16年度確認調査の結果を受けて、平成17年度は、次のような目的に基づく確認調査を実施することとした。

環状集落は縄文時代中期後半末（井戸尻３式期）から中期末葉（曽利Ｖ式期）までの竪穴住居から構成されることがすでに判明していた。そのため、前年度に調査対象とした１軒を含む竪穴住居７軒を発掘調査して、各時期の住居の構造や出土品を確認することとした。

内陸で丘陵地が多い山梨県では、縄文時代遺跡のほとんどが丘陵地の乾燥した台地上に立地する。そのため植生環境や食料資源に関する自然遺物、動植物遺体などの資料が発掘調査で得られることはごく稀である。そこで、確認調査においては、住居埋土等の全量を水洗して、炭化材や炭化種子、炭化物を回収して、環境復元等を試みることとした。回収された炭化物の年代測定や同定作業は専門業者に委託することとした。

精査時点で検出された多数の土坑については、その性格や分布傾向を把握することとし、主に調査対象とする住居に重複する土坑及びその周辺に分布する土坑 14 基を対象に、発掘調査を実施することとした。これまでの山梨県内の発掘調査成果から、曽利式期集落では、土坑が集中する形態の墓域が形成されず、墓坑は竪穴住居とともに環状集落全体に散漫に分布する傾向が知られている。梅之木遺跡でも同様の状況が予想されたが、その点の確認も目的のひとつである。

平成16年度調査で、環状集落本体は、遺跡北側に隣接する湯沢川に至る急斜面近くにまで展開していることが確認されている。こうしたことからも、この集落が湯沢川に用水を依存していたことが予想された。そこで、湯沢川の川岸で、何らかの生活痕跡の確認を目的として、トレンチ調査を実施することとした。湯沢川は丘陵地を流れる急流であり、その川谷はV字形に深く下刻されている。そのため、いわゆる「水場遺構」のような水流中に設けられる施設は残っていないことが予想されたが、川岸には狭いながらも河岸段丘状の平坦面が発達していたため、そうした地形条件の地点では、何らかの遺構の存在が期待された。

台地上の環状集落本体から湯沢川までは12mほどの比高差があり、北面する急斜面となっている。台地上から湯沢川に至るには、この斜度25度前後の急斜面を下りなければならない。集落に生活した縄文時代の人々は、毎日足繁く湯沢川に通ったことであろうから、この斜面には、彼らが通行した「道路」があったはずである。この「道路」を確認するために、斜面においてもトレンチ調査を実施することとした。すでに平成16年度調査で、この斜面にトレンチを発掘していたが、調査終了間際に、曽利V式土器の破片を伴う「道路」と思われる遺構が発見されていた。そこで、この箇所を中心にトレンチを発掘することとした。

川岸の調査にあわせて、河岸段丘状の平坦面が人為的な要因により生成したものか、自然的要因によるものかなどを検討するために、理化学的手法による地形生成過程の調査を行うことにした。この業務は専門業者に委託することとした。

長野県茅野市の国指定特別史跡「尖石遺跡」は、小河川を挟んで、尖石遺跡と与助尾根遺跡の、二つの同時期の集落跡が向き合うようにして立地している。いわゆる双環状集落であるが、梅之木遺跡から湯沢川を挟んだ対岸の尾根は、現在、松林となっているが、比較的緩斜面で、幅数十mの尾根幅がある。こうした地点に同時期の集落跡などが存在することを予想して、湯沢川北側の尾根などで、埋蔵文化財の所在を確認するための試掘坑調査を行うこととした。

以上の目的で実施した平成17年度確認調査の調査面積は、2573㎡で、調査日程は下記のとおりである。

今年度の確認調査には、考古学実習を目的として、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科の学生諸氏も、限られた期間であったが発掘調査に参加した。また、市内の特定非営利活動法人が企画したボランティア発掘事業に参加したボランティアも発掘調査に協力していただいた。発掘調査自体が、教育や生涯学習の目的に活用されることは、埋蔵文化財の保存活用の観点からも望ましいと判断して、市教育委員会では昭和女子大学等の参加を了承した。

| | | |
|---|---|---|
| 平成17年 | 4月 1日～ | 住居埋土水洗別作業 |
| | 6月 6日～ | 調査対象住居地点の除草・測量 |
| | 6月22日～7月22日 | 市内別遺跡の発掘調査のため調査中断 |
| | 7月19日～25日 | 重機による表土剥作業 |
| | 8月 1日～ | 住居・川岸、斜面のトレンチの発掘調査に着手 |
| | 8月 8日～ | 昭和女子大学発掘調査参加 |
| | 8月10日～ | 土坑の発掘調査に着手 |
| | 8月29日 | 川岸トレンチで敷石遺構を検出、トレンチ拡張 |
| | 9月 1日 | 川岸トレンチで集石土坑を検出 |
| | 9月16日～10月16日 | 市内別遺跡の発掘調査のため調査中断 |
| | 10月17日～ | 調査再開 |
| | 12月15日 | 第3回調査指導委員会 |
| | 12月17日 | 遺跡調査見学会 |
| | 12月19日 | 仮埋め戻しに着手 |
| 平成18年 | 1月18日 | 湯沢川北側尾根上の確認調査に着手 |
| | 3月31日 | 平成17年度確認調査を終了 |

なお、湯沢川北側尾根上の確認調査は、調査対象区域が広範囲に及んだため、年度末までに予定した全ての調査を実施したものの、調査成果を取りまとめて、指導委員会の指導助言を受けるには至らなかった。この点については、次年度の確認調査概要報告書で報告したい。

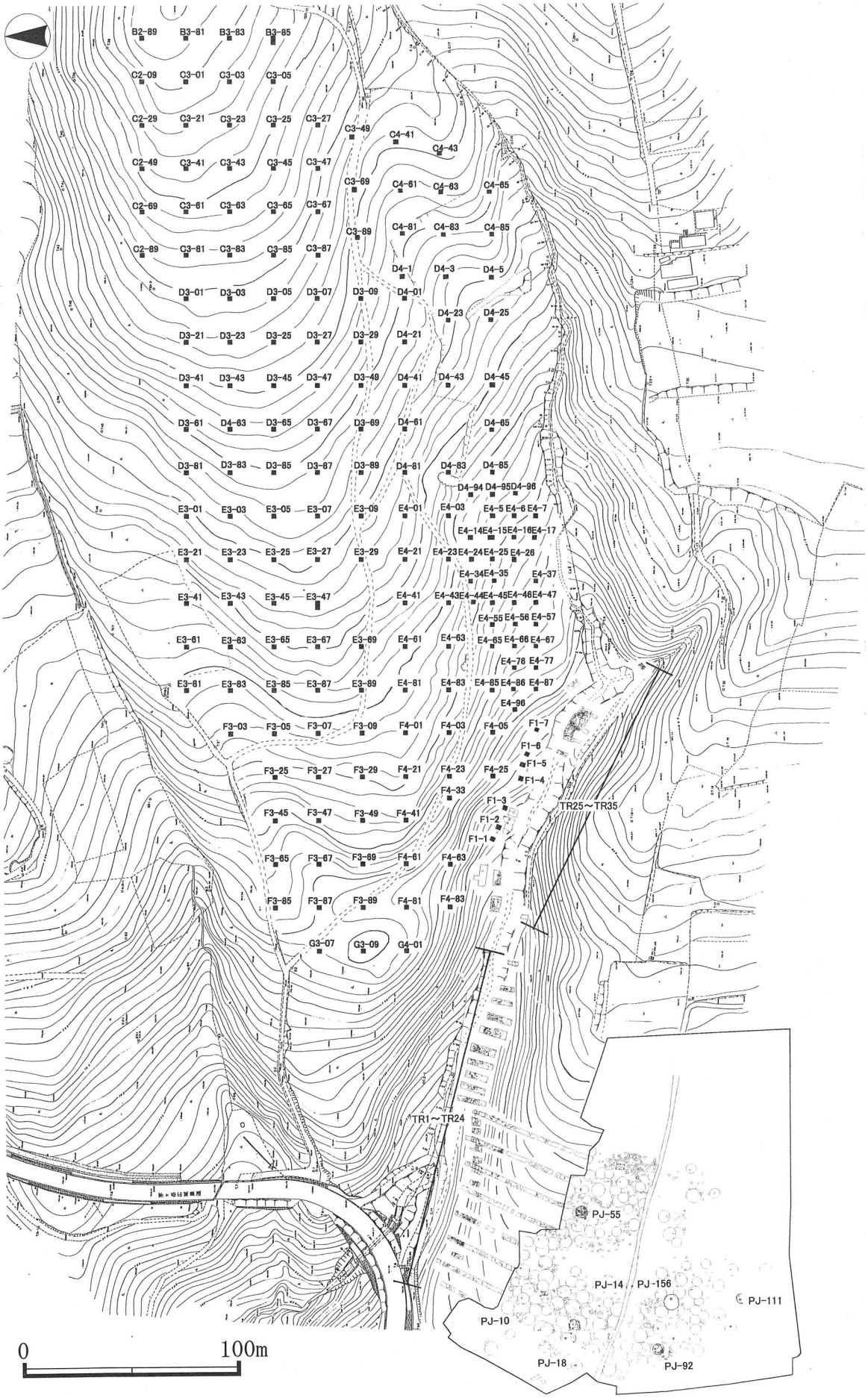
第１図　梅ノ木遺跡と周辺の縄文時代遺跡

## 第１表　遺跡地名表

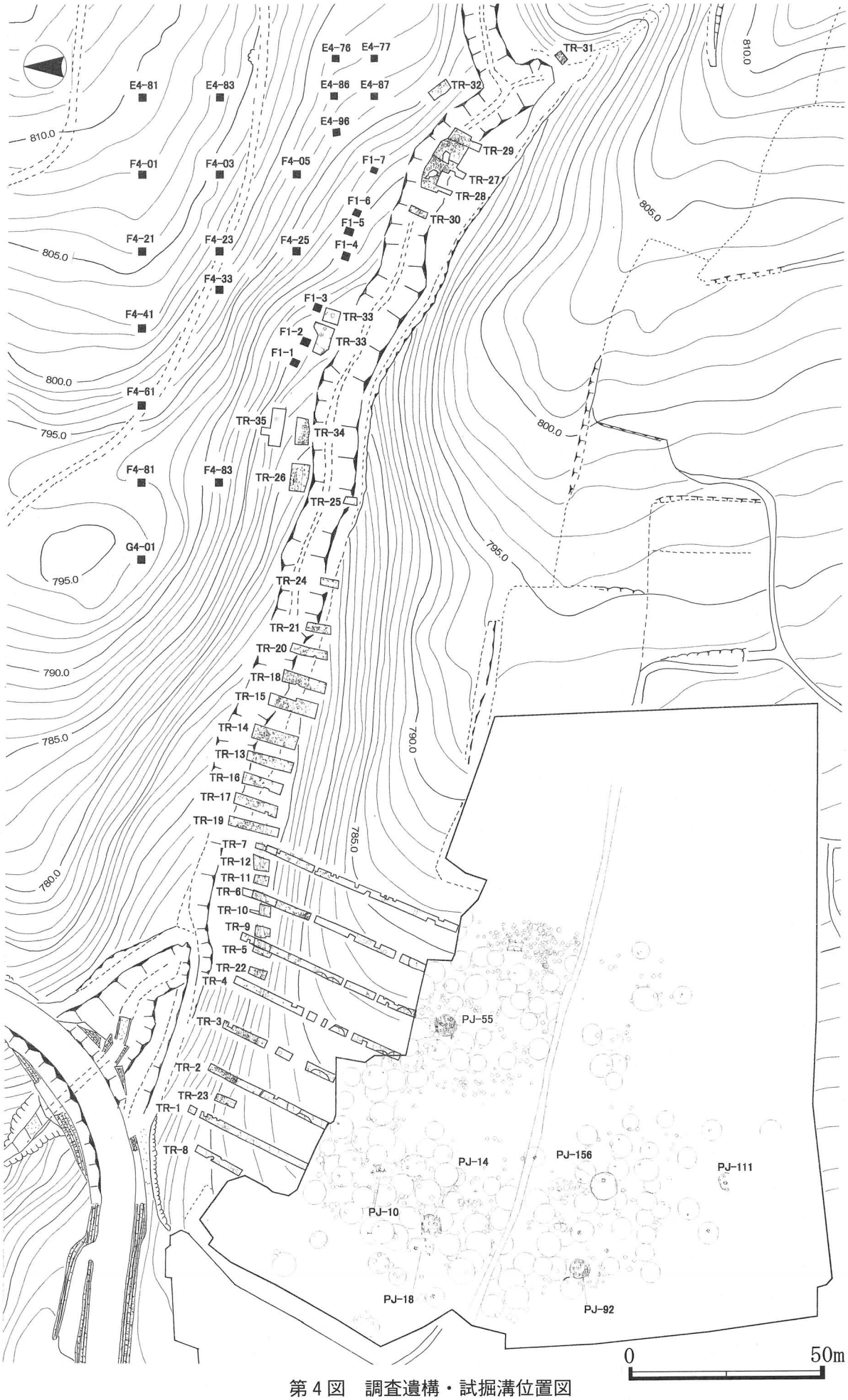
| 番号 | 遺　跡　名 | 所在地 | 時　期 | 遺　構 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 大和田・大和田第2 | 北杜市大泉町 | 曽利式 | 住居7軒、特殊土坑1基、土坑68基、溝2条 |
| 2 | 方城第1 | 北杜市大泉町 | 曽利式 | 住居7軒、土坑106基、集石3基、配石3基 |
| 3 | 姥神 | 北杜市大泉町 | 曽利式・加曽利B式 | 住居20軒、土坑30基、集石2基、配石 |
| 4 | 東姥神B | 北杜市大泉町 | 曽利式・加曽利E式・堀之内式 | 住居1軒、土坑 |
| 5 | 古林第4 | 北杜市大泉町 | 中期中葉 | 住居20軒、土坑178基 |
| 6 | 寺所第2 | 北杜市大泉町 | 中期初頭～後半・曽利式 | 住居93軒、土坑約250基 |
| 7 | 金生 | 北杜市大泉町 | 曽利式・堀之内式・加曽利B式・後期後半・晩期 | 住居41軒、土坑8基、配石5基、石組15基 |
| 8 | 甲ッ原 | 北杜市大泉町 | 前期～中期後半・曽利式 | 住居104軒、土坑800基以上 |
| 9 | 別当西 | 北杜市長坂町 | 曽利式・加曽利E式・称名寺式・堀之内式・後期末葉 | 住居8軒、土坑5基 |
| 10 | 小屋敷 | 北杜市長坂町 | 中期初頭～後半・曽利式・加曽利E式・称名寺式・堀之内式 | 住居1軒・土坑 |
| 11 | 柳坪・柳坪A | 北杜市長坂町 | 曽利式 | 住居29軒・土坑・配石 |
| 12 | 柳坪北 | 北杜市長坂町 | 五領ヶ台、曽利 | 住居4軒・土坑1 |
| 13 | 石原田北 | 北杜市長坂町 | 前期諸磯b・中期新道～藤内 | 住居18軒・土坑 |
| 14 | 糀屋敷 | 北杜市長坂町 | 曽利式か | 住居1軒 |
| 15 | 越中久保 | 北杜市長坂町 | 曽利式 | 住居4軒・土坑9基 |
| 16 | 高松 | 北杜市長坂町 | 中期初頭～中葉、曽利式 | 住居8軒・土坑13基 |
| 17 | 東蕪4 | 北杜市長坂町 | 曽利式 | 住居1軒・土坑8基 |
| 18 | 健康村 | 北杜市長坂町 | 前期・中期初頭・曽利式・晩期 | 住居7軒・土坑16基・焼土跡 |
| 19 | 清春白樺美術館南 | 北杜市長坂町 | 前期末、中期中葉、曽利式 | 住居7軒・土坑181基 |
| 20 | 酒呑場 | 北杜市長坂町 | 前期・中期・曽利式・称名寺式 | 住居220軒・土坑6000基以上・掘立柱建物・配石 |
| 21 | 頭無 | 北杜市長坂町 | 曽利式 | 住居14軒・土坑 |
| 22 | 紺屋 | 北杜市長坂町 | 中期中葉・藤内 | 住居2軒・土坑5基 |
| 23 | 上日野B | 北杜市長坂町 | 中期中葉・藤内 | 住居1軒・土坑11基 |
| 24 | 宮久保 | 北杜市長坂町 | 曽利式・加曽利E式・堀之内式 | 住居4軒、列石1基・土坑 |
| 25 | 原町農業高校前 | 北杜市長坂町 | 中期・曽利式・称名寺式 | 住居102軒、土坑420基 |
| 26 | 中原 | 小淵沢町 | 曽利式 | 住居10軒 |
| 27 | 石堂B | 北杜市高根町 | 堀之内式・加曽利B式・後期後半・晩期 | 住居11軒・石棺墓24基・配石 |
| 28 | 野添 | 北杜市高根町 | 曽利式 | 住居4軒・土坑 |
| 29 | 米田 | 北杜市高根町 | 曽利式 | 住居1軒 |
| 30 | 持井 | 北杜市高根町 | 中期前葉 | 埋甕1基 |
| 31 | 西原 | 北杜市高根町 | 曽利式 | 住居1軒 |
| 32 | 下風呂 | 北杜市高根町 | 曽利式 | 住居1軒 |
| 33 | 青木 | 北杜市高根町 | 堀之内式・加曽利B式・後期後半 | 住居15軒・石棺墓20基・配石・土坑 |
| 34 | 社口 | 北杜市高根町 | 草創期・早期・中期前半～後半・曽利式・堀之内式 | 住居49軒・土坑多数 |
| 35 | 上の原 | 北杜市高根町 | 中期中葉～後期初頭 | 住居9軒・土坑 |
| 36 | 川又坂上 | 北杜市高根町 | 曽利式・称名寺式・晩期 | 住居3軒・土坑14基・掘立柱建物1棟 |
| 37 | 海堂前C | 北杜市高根町 | 中期中葉～後半・曽利式 | 住居21軒・土坑68基・焼土跡2基 |
| 38 | 宮の前 | 北杜市高根町 | 中期中葉～後半・曽利式 | 住居2軒・土坑 |
| 39 | 蔵原東久保 | 北杜市高根町 | 中期中葉～後葉 | 住居65軒・土坑約400基 |
| 40 | 蔵原前久保 | 北杜市高根町 | 中期中葉 | 住居2軒・土坑40基 |
| 41 | 東久保 | 北杜市高根町 | 中期中葉、曽利式 | 住居30軒・土坑50基以上 |
| 42 | 日影田 | 北杜市高根町 | 中期初頭～中葉、曽利式 | 住居5軒・土坑113基 |
| 43 | 次郎構 | 北杜市高根町 | 曽利式 | 住居13軒・土坑187基 |
| 44 | 斜 | 北杜市高根町 | 井戸尻式～曽利式 | 住居3軒 |
| 45 | 新井 | 北杜市高根町 | 曽利式 | 住居2軒 |
| 46 | 桑原 | 北杜市須玉町 | 堀之内式・加曽利B式・後期後半～晩期 | 住居2軒 |
| 47 | 桑原南 | 北杜市須玉町 | 加曽利B式・後期後半～晩期 | 住居3軒 |
| 48 | 原の前 | 北杜市須玉町 | 中期中葉、曽利式 | 住居20軒 |
| 49 | 津金御所前 | 北杜市須玉町 | 中期後半・曽利式 | 住居5軒 |
| 50 | 塩川 | 北杜市須玉町 | 前期・曽利式 | 住居5軒・土坑3基 |
| 51 | 郷蔵地 | 北杜市須玉町 | 加曽利Ｅ式 | 住居1軒 |
| 52 | 川又・川又南 | 北杜市須玉町 | 中期中葉・曽利式・加曽利E式・堀之内式 | 住居7軒・配石・埋設土器群 |
| 53 | 飯米 | 北杜市須玉町 | 曽利式 | 住居12軒・配石 |
| 54 | 宮田・笠張 | 北杜市須玉町 | 曽利式 | 住居2軒 |
| 55 | 平山 | 北杜市須玉町 | 曽利式 | 住居8軒 |
| 56 | 上ノ原 | 北杜市須玉町 | 曽利式・加曽利E式・称名寺式・堀之内式 | 住居142軒・土坑661基 |
| 57 | 上原 | 北杜市明野町 | 曽利式・加曽利E式・称名寺式・堀之内式 | 住居・土坑 |
| 58 | 諏訪原 | 北杜市明野町 | 早期・中期中葉～後半・曽利式・加曽利E式・称名寺式・堀之内式 | 住居46軒以上・土坑多数 |
| 59 | 寺前 | 北杜市明野町 | 前期・中期前半・曽利式・堀之内式 | 住居30軒・土坑・土器捨て場 |
| 60 | 梅之木 | 北杜市明野町 | 曽利式 | 住居130軒以上・土坑400基 |
| 61 | 清水端 | 北杜市明野町 | 曽利式・加曽利E式・称名寺式・堀之内式・加曽利B式 | 住居2軒 |
| 62 | 平林 | 北杜市明野町 | 中期中葉～後半・曽利式 | 住居・土坑 |
| 63 | 高台・中谷井 | 北杜市明野町 | 曽利式・称名寺式・堀之内式 | 住居1軒 |
| 64 | 駒飼場 | 北杜市明野町 | 曽利式 | 住居2軒 |
| 65 | 中原 | 北杜市明野町 | 曽利式・堀之内式 | 住居8軒・土坑 |
| 66 | 屋敷添 | 北杜市明野町 | 前期・曽利式・加曽利E式・称名寺式・堀之内式・加曽利B式 | 住居8軒・土坑・配石 |
| 67 | 上小用 | 北杜市白州町 | 中期中葉、曽利式 | 住居23軒 |
| 68 | 古御所東 | 北杜市白州町 | 中期中葉 | 住居1軒 |
| 69 | 根古屋 | 北杜市白州町 | 前期・曽利式 | 住居13軒・土坑26基 |
| 70 | 真原A | 北杜市武川町 | 中期中葉・曽利式 | 住居13軒・土坑225基 |
| 71 | 東原B | 北杜市武川町 | 中期中葉狢沢式～新道式 | 住居5軒 |
| 72 | 黒澤 | 北杜市武川町 | 前期・中期中葉・曽利式 | 住居6軒・土坑 |
| 73 | 向原 | 北杜市武川町 | 前期前半・中期中葉、曽利式 | 住居24軒・土坑45基 |
| 74 | 石之坪 | 韮崎市 | 早期・前期・中期・曽利式・称名寺式・堀之内式 | 住居223軒・土坑多数 |
| 75 | 宿尻 | 韮崎市 | 曽利式・加曽利E式・称名寺式・堀之内式 | 住居8軒・土坑 |
| 76 | 宮ノ前 | 韮崎市 | 前期・中期・曽利式・称名寺式・堀之内式・晩期 | 住居6軒・配石 |
| 77 | 北後田 | 韮崎市 | 前期・曽利式 | 住居15軒 |
| 78 | 後田 | 韮崎市 | 曽利式・堀之内式 | 住居3軒・配石 |
| 79 | 三宮地 | 韮崎市 | 中期前葉 | 住居1軒 |
| 80 | 坂井 | 韮崎市 | 前期・中期・曽利式・加曽利E式 | 住居17軒・土坑 |
| 81 | 新田 | 韮崎市 | 曽利式・称名寺式・堀之内式 | 土坑49基・配石 |
| 82 | 飯米場 | 韮崎市 | 中期中葉～後半・曽利式 | 住居3軒・土坑27基 |
| 83 | 下馬城 | 韮崎市 | 中期中葉、曽利式 | 住居2軒・土坑2基 |

浅尾
平成16年度調査区
平成17年度調査区
平成14年度調査区
平成16年度調査区
平成15、16年度調査区
湯沢川
平成14年度調査区
茅ケ岳広域農道
平成12年度調査区
0
500m

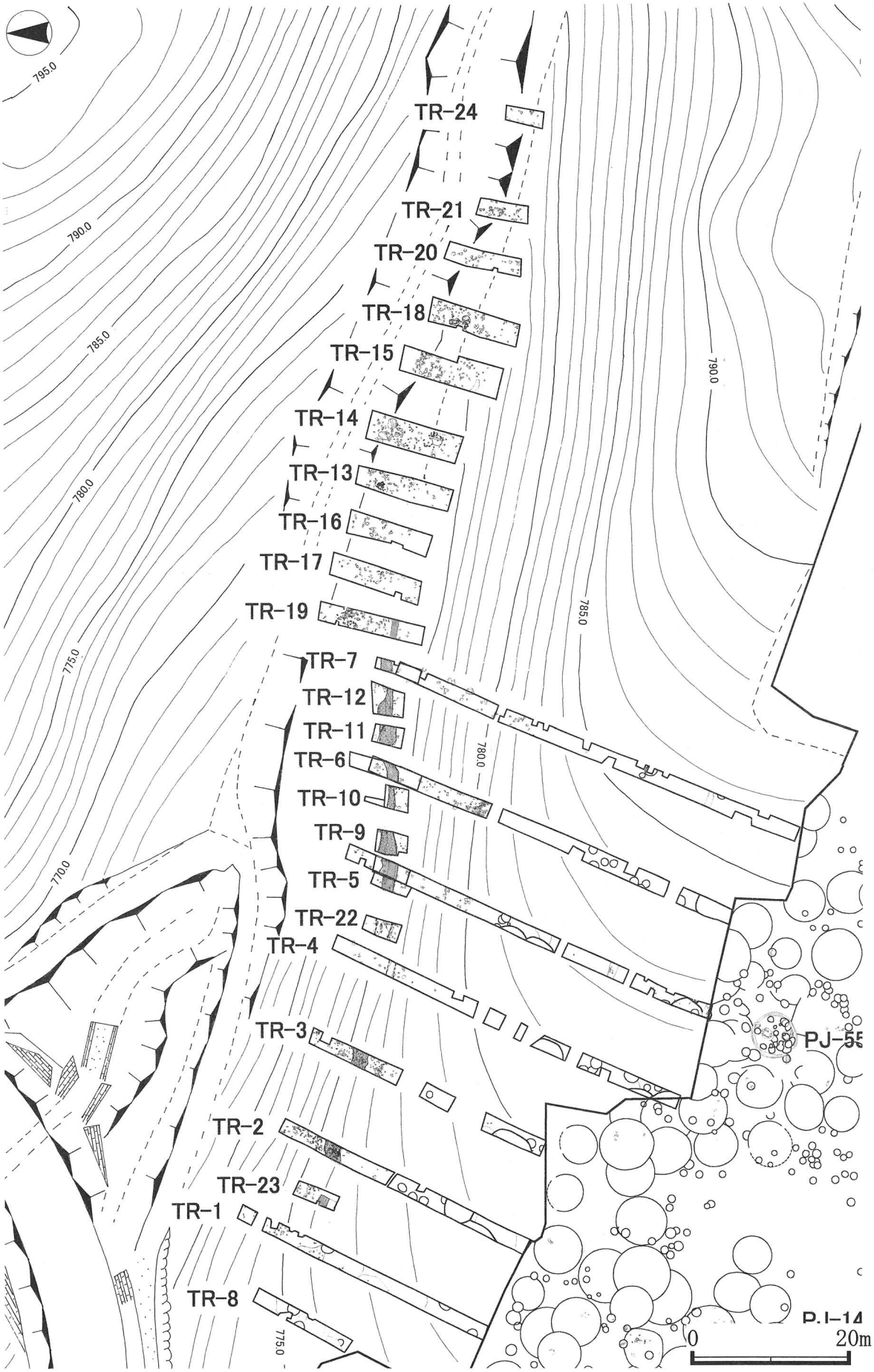
第２図　調査地点図


B2-89 B3-81 B3-83 B3-85
C2-09 C3-01 C3-03 C3-05
C2-29 C3-21 C3-23 C3-25 C3-27
C3-49 C4-41 C4-43
C2-49 C3-41 C3-43 C3-45 C3-47
C3-69 C4-61 C4-63 C4-65
C2-69 C3-61 C3-63 C3-65 C3-67
C3-89 C4-81 C4-83 C4-85
C2-89 C3-81 C3-83 C3-85 C3-87
D4-1 D4-3 D4-5
D3-01 D3-03 D3-05 D3-07 D3-09 D4-01
D4-23 D4-25
D3-21 D3-23 D3-25 D3-27 D3-29 D4-21
D3-41 D3-43 D3-45 D3-47 D3-49 D4-41 D4-43 D4-45
D3-61 D4-63 D3-65 D3-67 D3-69 D4-61 D4-65
D3-81 D3-83 D3-85 D3-87 D3-89 D4-81 D4-83 D4-85
D4-94 D4-95 D4-96
E3-01 E3-03 E3-05 E3-07 E3-09 E4-01 E4-03 E4-5 E4-6 E4-7
E4-14 E4-15 E4-16 E4-17
E3-21 E3-23 E3-25 E3-27 E3-29 E4-21 E4-23 E4-24 E4-25 E4-26
E4-34 E4-35 E4-37
E3-41 E3-43 E3-45 E3-47 E4-41 E4-43 E4-44 E4-45 E4-46 E4-47
E4-55 E4-56 E4-57
E3-61 E3-63 E3-65 E3-67 E3-69 E4-61 E4-63 E4-65 E4-66 E4-67
E4-76 E4-77
E3-81 E3-83 E3-85 E3-87 E3-89 E4-81 E4-83 E4-85 E4-86 E4-87
E4-96
F3-03 F3-05 F3-07 F3-09 F4-01 F4-03 F4-05 F1-7
F1-6
F1-5
F3-25 F3-27 F3-29 F4-21 F4-23 F4-25 F1-4
F4-33
F1-3
F3-45 F3-47 F3-49 F4-41 F1-2
F1-1
F3-65 F3-67 F3-69 F4-61 F4-63
F3-85 F3-87 F3-89 F4-81 F4-83
G3-07 G3-09 G4-01
TR25～TR35
TR1～TR24
PJ-55
PJ-14 PJ-156
PJ-111
PJ-10
PJ-18
PJ-92
0
100m

第３図　調査地点詳細図




第４図　調査遺構・試掘溝位置図


795.0
790.0
785.0
780.0
775.0
770.0
TR-24
TR-21
TR-20
TR-18
TR-15
TR-14
TR-13
TR-16
TR-17
TR-19
TR-7
TR-12
TR-11
TR-6
TR-10
TR-9
TR-5
TR-22
TR-4
TR-3
TR-2
TR-23
TR-1
TR-8
PJ-55
PJ-14
0
20m

第５図　試掘溝位置図

## 第２章　確認調査の方法と成果の概要

本章では、確認調査の方法と成果の概要について、遺構の種別、調査地点ごとに述べる。

### 第１節　竪穴住居の調査

本遺跡では、縄文時代中期後半の井戸尻式期から曽利Ⅴ式期までの遺構が想定されたことから、各時期の竪穴住居１軒ずつ、計６軒の竪穴住居を抽出して発掘調査し、住居構造、出土遺物等を確認することとした。発掘対象とする住居は、遺構精査段階で、時期がある程度推定でき、保存状態が良好で、情報量が多いと見込まれるものを、事前に試掘溝を発掘したうえで、抽出した。このうち、曽利Ⅱ式期の住居（55 号住居）は、平成 16 年度にすでに調査に着手し、調査成果は平成 16 年度概要報告書で報告している。

それでも精査段階の出土品は、必ずしも遺構の時期を正確に反映しておらず、結果として、井戸尻３式期（92 号住居）、曽利Ⅰ式期（111 号住居）、曽利Ⅱ式期（55 号住居）、曽利Ⅳ式期（14・18・156 号住居）の住居を調査対象とすることができたものの、曽利Ⅲ式期、曽利Ⅴ式期の住居と目したものは、いずれも曽利Ⅳ式期に属する遺構であった。

また精査段階では正確な時期が不明であったが、敷石住居状の遺構（10 号住居）が確認されていたため、発掘調査対象に含めた。当地域では、曽利Ⅳ式期から曽利Ⅴ式期にかけて敷石住居が出現すると見込まれているが、なお資料数が少ないため、あえて発掘調査の対象とした。

発掘調査では、平成 16 年度概要報告書に述べたとおり、住居埋土の全量を水洗別することとした。また方法論的には試験段階ではあるが、埋土の軟Ｘ線構造分析を実施し、肉眼による観察所見と対比して、住居の埋没理由、過程を検討することとした。

以下に 92 号住居、111 号住居、55 号住居、14 号住居、18 号住居、156 号住居、10 号住居の調査成果の概要を述べたい。

#### 92 号住居跡（第８図　写真図版２）

精査段階で２軒が確認された井戸尻３式期の住居である。本遺跡の開始時期の遺構であることから、保存状態が必ずしも良好ではなかったが、発掘調査対象とした。

長径 5.4 m、短径 5.2 m の楕円の住居跡で、竪穴は深さ 0.2 m程度が残っている。住居北西部では土坑と重複する。

遺物は井戸尻３式期を主体とした５個体の土器破片 2,134 g とその他の土器破片 606 点 12,221 g、石器　磨石２点 1,160 g、凹石２点 804g、打製石斧６点 526g、石鏃３点 2g、礫石器１点 148g、剥片石器７点 319g、剥片 12 点 256g、石材１点 5g、礫 35 点 6,356g、黒曜石剥片 12 点 35g が出土した。調査期間の制約から柱穴の発掘には至らなかったが、住居中央付近に地床炉を据え、５ないし６基の主柱穴が小溝で連結される、当地域の当該時期の住居に典型的な形態であることが推測される。

#### 55 号住居（写真図版４）

平成 16 年度から調査に着手したため、図版は平成 16 年度概報に掲載した。本年度は、柱穴と重複する土坑の調査を主として実施した。柱穴の調査は、床面で検出された柱穴の埋土表面を観察し、床面もしくは床面状の硬化面の有無を写真等で記録したうえで、埋土全体を柱痕が認識できる深さまで掘り下げて、柱痕が確認された時点で半截して底部まで掘り下げた。

柱穴の１基は、柱痕が確認されず、底部に石器、礫が敷き詰められていた。

55 号住居埋土は全量の水洗別が終了したため、回収した炭化材の樹種同定作業を行った。回収総量等の詳細は本報告に記載するが、クリ、コナラ、クヌギ、オニグルミ、モミ属、マツ属、キリ、ヌルデ、モモ、クワ属、モ

クレンなどが同定された。遺跡が所在する一帯は、近世以降、開墾されて畑地として利用されてきたから、クワ、モモ、キリなどは、営農活動の過程で混入したものと推測され、事実、クワは埋土上層ほど比率が高くなる傾向が明らかに看取された。一方で、当初の予想に反してクリが主体を占める傾向も確認された。クリは縄文時代にあっては、建材として利用頻度が高いことが知られているが、住居埋土には、建材だけでなく薪炭材など雑多な用途のために集落内あるいは住居内に搬入された樹種の炭化材が混入していると予想していた。本住居での分析のみから結論することは差し控え、ほかの住居等の水洗別・樹種同定結果を待って、本遺跡周辺の木本・草本環境、用材傾向等を検討したい。

14号住居（第6図　写真図版5）

曽利Ⅳ式期の住居と想定して発掘調査を実施したところ、曽利Ⅳ式前半段階の住居であることを確認した。西側が別住居と重複する。

径5m程度の楕円形の住居で、竪穴の深さは0.3mである。住居中央よりやや奥まった位置に石囲炉を据え、主柱穴は5基と想定されるが、うち1基は別住居と重複するため、未確認である。

石囲炉は、曽利Ⅳ式期にしてはやや古風で、平たい石を円形に並べ置く、曽利Ⅱ式期頃によくみられる「石置炉」である。

遺物は、曽利Ⅳ式期を主とした土器破片、磨石、打製石斧、礫石器、剥片石器、石鏃、黒曜石剥片、その他の石材剥片、礫などが出土している。

18号住居（第6図～第7図　写真図版5・6）

14号住居の西側に隣接する住居で、精査段階の出土品から曽利Ⅲ式期の住居と予想して発掘調査したものである。ところが実際に発掘してみると曽利Ⅳ式後半段階の出土品が主体を占め、また2基が確認された埋甕も曽利Ⅳ式期であった。住居南側は別住居と重複する。西側1/3は、畑の造成のために削平され失われているが、柱穴は確認できた。

住居は長径6.1mの楕円形で、竪穴は東側で深さ0.45mである。住居中央より奥寄りに石囲炉を据え、主柱穴は5本である。埋甕2基が検出された。

住居東壁沿いに石柱2本が置かれている。また埋甕の東側の壁沿いでは板状礫が壁に立てかけるように斜めになって検出された。この立石状の礫と埋甕との間の床面上には、拳大の白色の珪岩と磨製石斧が置かれていた。火を受けたらしく、ひび割れて赤変している。

出土品は床面より10cm以上高い埋土中層から主に出土している。埋甕を除く曽利Ⅳ式期を主体とした16個体の土器破片29,528g、その他の土器破片1,614点33,820g、磨製石斧3点648g、打製石斧7点568g、磨石4点2,455g、敲石3点1,540g、石鏃3点2.3g、石錐1点2g、黒曜石の剥片石器4点10g、黒曜石剥片106点370g、その他の石材の剥片石器2点36g、剥片38点621g、石材9点710g、礫79点46,034g、石柱2点、石柱破片1点2,625gが出土した。

111号住居（第9図　写真図版3）

曽利Ⅰ式期の住居と予想して発掘調査を実施した。畑の造成でかなり削平されており、保存状態は良好ではないが、精査段階の出土品から曽利Ⅰ式期である可能性が高いと見込まれたことから発掘調査の対象とした。

住居は1/2が削平されて失われ、また営農による撹乱も著しい。石囲炉と柱穴1基が確認された。柱穴の横からは土偶が出土した。

出土品は少ないが、出土した土偶、鉢形土器、石囲炉の形状などから、曽利Ⅰ式期の住居と判断してよいもの

と思われる。

遺物は、3個体の土器破片1,552g、その他の土器破片352点5,198g、敲石1点304g、掻削器2点122g、打製石斧2点150g、磨製石斧1点256点、石鏃2点2g、黒曜石剥片13点6g、その他の石材剥片26点253g、石材4点234g、礫13点274g、土偶1点244gが出土した。

156号住居（第10図～第11図　写真図版7・8）

精査段階の出土品から曽利Ⅴ式期の住居と予想して発掘調査したものである。実際に発掘したところ、埋土上層部から曽利Ⅴ式期の土器がまとまって出土し、埋土下層から床面直上には曽利Ⅳ式後半段階の土器が多く出土した。

住居は直径7.3ｍで、曽利式期の住居としては非常に大型である。住居の奥壁寄りに石囲炉を据え、5本の主柱穴を有する。埋甕1基が検出されている。

当地域の曽利Ⅴ式期の住居は概して小型化し、竪穴も浅くなる傾向にある。本住居は、出土品や住居形態から、曽利Ⅳ式期とすべきものである。

遺物は、16個体分の土器破片13,320g、その他の土器破片2258点50,650g、打製石斧2点155g、石鏃7点6g、ハチノス石1点3,140ｇ、磨石5点4,321g、丸石5点2,698g、黒曜石剥片156点191g、その他の石材剥片71点1,361g、剥片石器8点237g、礫136点70,522gが出土した。

10号住居（写真図版8）

平石が敷かれた住居で、曽利式末葉頃と想定されたため、発掘調査を実施したが、遺構の保存状態が悪く、炉跡と床面がすぐに検出される状態で、出土品も小さな土器片が少数出土するのみであり、詳細なことは判明しなかった。

当地域では、曽利式期になって住居内部に平石を搬入して使用する例が出現し、曽利Ⅳ式期頃から炉などの周辺に部分的に複数の平石を平面的に敷く事例がみられるようになる。本住居も恐らくは曽利Ⅳ式ないしⅤ式期の遺構であると推測される。特に竪穴が浅く、炉跡が小型であるため、曽利Ⅴ式期の可能性が高いと思われる。

## 第2節　土坑の調査

土坑は、発掘調査対象とした住居の周辺で検出されたもののなかから、14基を調査した。住居と同様、埋土は全量を水洗別することとした。本概要報告では詳細を報告するに至っていないが、土坑は規模形状、遺物の有無、埋土の状況から、たとえば墓坑、貯蔵穴などに区別されそうである。今のところ、掘立柱建物跡を構成する柱穴は確認されていない。

## 第3節　集落範囲の確認調査

平成16年度には台地上に展開する環状集落そのものの範囲を確認したが、今年度の調査では、湯沢川を中心に生活痕跡の有無を確認するため、試掘溝31ヶ所、試掘坑151ヶ所を発掘した。以下、調査地点ごとに目的と成果を報告する。

湯沢川周辺（第18図～第33図　写真図版17～30）

まず環状集落の北に流れる湯沢川は、集落の生活を支えた水源であったと想定されるため、湯沢川周辺で、水場遺構などの有無を確認するため、試掘溝22ヶ所を発掘した。湯沢川は丘陵地を流れる急流で、その川谷はＶ字形に深く下刻されている。川の流れのなかに設置されるいわゆる水場遺構は残存していない可能性が高いと思

われたため、まずは湯沢川左岸の河岸段丘状の狭い平坦面に試掘溝を発掘した。必要に応じて出土炭化材の年代測定を実施し、川谷の生成過程を検討するための理化学的観察を実施した。

調査開始からすぐに曽利Ⅱ式からⅤ式に至る縄文土器を主体として、弥生時代中期頃の条痕文土器、平安時代の土師器が出土した。そうしたところ、13号・14号・18号・19号試掘溝において、現地表面から30cmほど掘り下げた粘質の暗褐色土の地山上で、焼けた礫がまとまった集石土坑、焼土跡、土坑、平石を用いた敷石遺構が検出された。

これらの遺構のうち、敷石遺構は曽利Ⅳ式土器を多数伴ったため、時期が確定できたが、集石土坑などについては、周辺で曽利式土器が出土しているものの、確実に遺構に伴った状態ではなかったため、出土炭化材の年代測定を行った。年代測定の結果は、平成19年度刊行予定の本報告書において詳細に報告するが、敷石遺構が4,290 ± 40yrBP、集石土坑が4,340 ± 40yrBPとなっており、伴出遺物の年代観に合致する結果となったが、その他の遺構は遺構検出面で採取した試料であるためか、やや新しい年代値が出ている。今後、遺構内部のより確実な試料による測定を実施して、検討したい。焼土跡には焼成粘土塊が伴っていたことから、将来、粘土の成分分析を行い、土器胎土との比較を行ってみたい。

川岸の遺構群からさらに上流部分でも調査を実施した。縄文時代中期、後期、弥生時代の遺物が出土し、土坑と集石らしき遺構を検出した。土坑は、検出地点で、おそらく平安時代以降に発生した地滑りのために、ほとんど削平されており、発掘したところ深さ5cm程度がかろうじて残存しているのみで、遺物は出土しなかった。集石は、焼けた礫10点ほどがハチノス石を伴ってまとまっていたが、発掘したところ、掘り込みは検出されなかった。

環状集落と湯沢川との間の斜面（第12図～第17図　写真図版9～16）

湯沢川岸で環状集落と同時期の生活痕跡が確認できたことから、次に、環状集落と湯沢川とをつなぐ北斜面に「道路」の存在を想定して、試掘溝を発掘した。すでに平成16年度調査に発掘した6号試掘溝で、曽利Ⅴ式土器破片を伴う「道路」と思われる造成箇所を確認していたため、隣接する地点を中心に斜面全体に改めて試掘溝を発掘することとした。

そうしたところ、現地表下20cm～30cmほどにおいて、帯状硬化面と、斜面を削りこんで幅1mほどの平坦面を造成した遺構が確認され、それらは環状集落西端から川岸の19号試掘溝地点との間、約70mを直線的に連結していることが判明した。

このことから、この帯状硬化面と遺構は、人為的な「道路」と判断してよいと考えたが、その時期認定には慎重を期するべきところである。これまでの調査では、1)伴出する遺物は曽利Ⅱ式からⅤ式の土器破片のみであること、2)弥生時代から平安時代にかけて生成されたと思われる黒色土層の下で道路状遺構が検出されていること、3)近世以降の土地利用を反映していると考えられる地籍図等には、当該地点に道路が認められないこと、4)環状集落と川岸の遺構群を明確に連結していること、などの所見が得られており、こうした点から、調査指導委員会では、縄文時代の道路と認定してよいとの判断が下された。

この「道路」状遺構では、わずかながら炭化材が出土していることから年代測定を実施したところ、1,800 ± 50yrBPと7,250 ± 50yrBPという、二つのかけ離れた測定値が得られた。ただし、測定者によると、試料には土壌の混在があり、測定値の信頼度は高くないとのことである。平成18年度の調査において、さらに追加的な測定を実施したい。

「道路」状遺構には、帯状硬化面が確認される地点と、斜面を削りこんで平坦面を造成した地点とがあり、その構造に差異が認められた。そこで、10号試掘溝で帯状硬化面を断ち割って、掘り下げたところ、30cm下から造成による平坦面が検出された。このことから、「道路」は、まず斜面を造成して建設され、その後、使用するう

ちに風雨により斜面上方から土砂が「道路」面上に堆積し、それらの上を歩行するうちに硬化面が形成されたと考えられる。

この場合、硬化面と路面との間の土層は、周囲の道路ではなかった土層よりも硬くなっている可能性がある。また、最上面で検出された硬化面と別の硬化面が複数存在することも考えられるが、調査期間が真冬に入っていたため、セクション面で土壌硬度等を測定することができなかった。平成18年度調査で改めて確認したい。

湯沢川北側の尾根（第3図・第34図　写真図版31）

中部地方の縄文時代集落においては、たとえば長野県茅野市の特別史跡尖石遺跡と与助尾根遺跡のように谷を挟んで対峙する二地点の集落跡が確認されることがある。本遺跡においても同様の状況があり得ると思われたことから、湯沢川北側の尾根上で遺構の有無を確認する調査を実施し、試掘坑151ヶ所を発掘した。

調査の結果、縄文時代前期末、縄文時代中期中葉～末葉、縄文時代後期の遺物と、弥生時代中期、平安時代の住居跡を検出したが、縄文時代中期の集落跡は存在しないと判断された。

## 第３章　調査成果と課題

前章で調査の目的、方法と成果の概要を報告した。ここでは調査指導委員会の指導内容に沿って成果を再確認するともに、平成18年度の確認調査に向けて、調査課題を確認しておきたい。

### 環状集落内の確認調査

平成16年度に引き続き実施した竪穴住居等の調査の結果、平成15年度に検出した遺構群は、確かに曽利式期を主体とした住居跡群であることが確認された。ただし、井戸尻３式期から曽利Ⅴ式期にかけて、各時期の住居跡１軒ずつを調査し、その構造等を確認するという当初の目的は、完全には達成されなかった。そのため、平成18年度調査において、曽利Ⅰ式、曽利Ⅲ式、曽利Ⅴ式の各時期の住居跡１軒ずつを追加して調査を実施する必要がある。

住居埋土の水洗別では、驚くほど多量の炭化材等が回収され、その分析から集落内外の植生環境の復元、食資源に関する基礎データが得られると期待される。実際、曽利Ⅱ式期の55号住居跡からは、炭化した球根類が回収されており、低湿地遺跡が少ない中部高地の丘陵地の遺跡では、有効な調査方法であることが再確認された。

土坑は、調査数が少なく、土坑の性格、性格ごとの分布傾向などを把握するには至っていない。さらに調査する土坑数を増やし、本遺跡のおける土坑の在り方を検討する必要がある。

### 湯沢川岸の確認調査

敷石遺構等の存在が確認されたが、その性格は不明な点が多い。特に、従来、全国各地で30例ほどが知られる、木の実のアク抜きや木製品加工等を目的とした「水場遺構」とは、性格が異なる遺構群で、類例もさほどに知られていない。それだけに、本遺跡で確認された遺構の性格づけは重要である。指導委員会において、平成18年度調査に、性格の確認を目指した追加調査を実施するべきとの指導があった。

### 「縄文時代の道路」状遺構

平成17年度調査では、試掘溝での調査であったため、視覚的に連続した「道路」であることを認識しにくい状況にあった。平成18年度調査では、５号試掘溝から６号試掘溝にかけての調査区を連結し、視覚的にも認識しやすい調査区に改めて、記録を作成するよう指導委員会での指導があった。また、年代測定を追加して実施し、より確実な時期認定に努める必要がある。

### 湯沢川北側尾根の確認調査

平成17年度調査において、いわゆる「双環状集落」となるような集落跡は存在しないことを確認し、当初の目的を達成した。したがって、尾根上の調査は今年度をもって終了し、次年度以降は、特に必要性が生じない限り、調査は実施しないこととした。

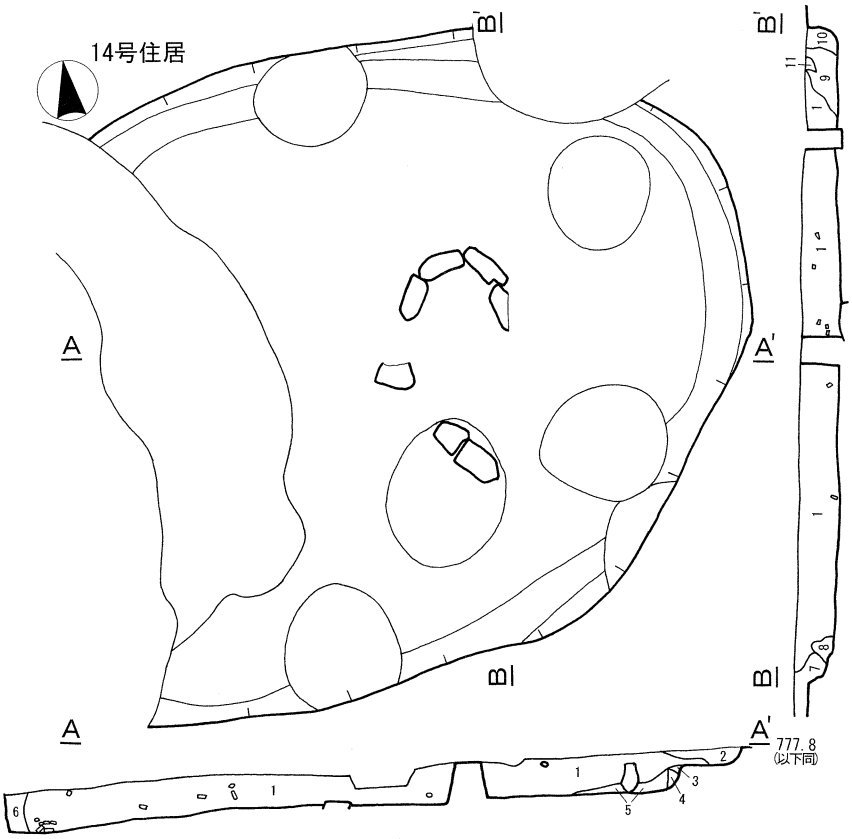
### 調査の総括

詳細な調査結果の報告と総括は、平成19年度刊行予定の本報告書に記載したいが、平成17年度の確認調査においては、本遺跡の文化財的価値の評価に係る重要な発見が得られた。

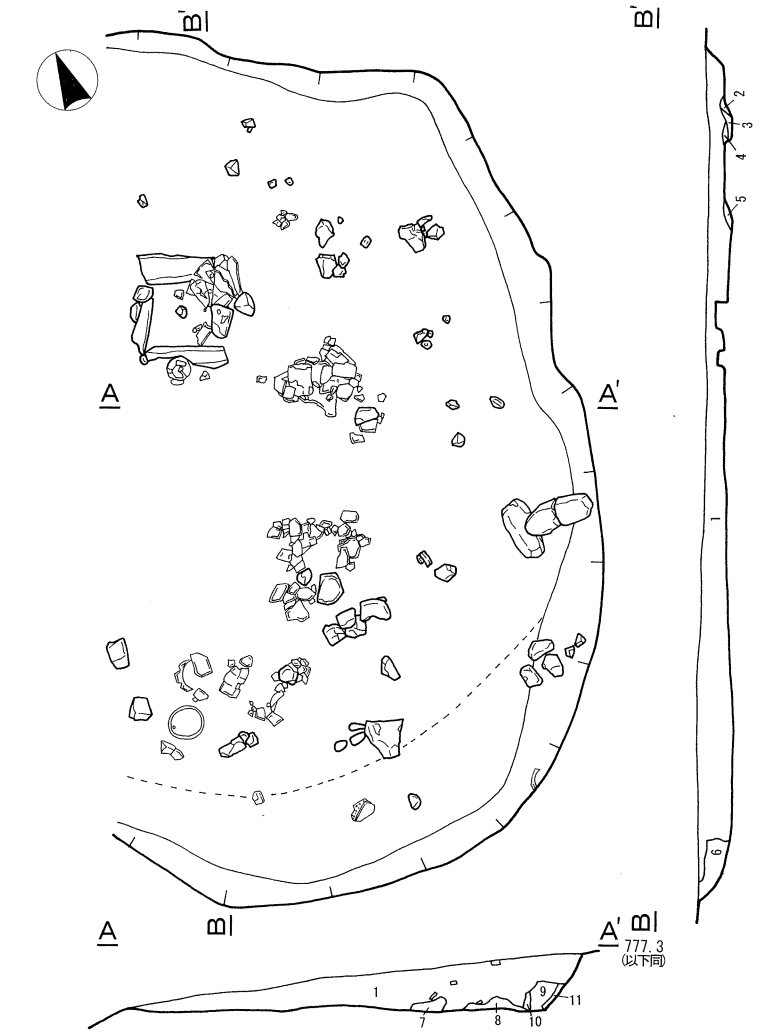
環状集落は、縄文時代集落のひとつの典型的な形態として一般的であるが、多様な生活舞台のあくまで部分に過ぎない。本遺跡では、環状集落に加え、川岸の作業場とでもいうべき生活痕跡と道路が確認され、より立体的な縄文集落の姿が浮かび上がってきた。遺構こそ検出されなかったものの、湯沢川上流部と北側の尾根上でもわずかながら縄文時代の遺物が出土しており、さらに周辺が多様な生産活動の場として利用されていた可能性も窺

える。

調査指導委員会において、「最古、最大・・・ということでなく、梅之木遺跡ならではの特徴を見出すことができれば（文化財的価値が一層高まる）」との指摘があったが、当然、縄文時代当時にあったであろう生活の施設が、実際に梅之木遺跡に残っており、確認調査でその存在が明らかにされたことの意義は大きいと思われる。と同時に、縄文集落遺跡の広がりについて、より広範囲な視点が求められることにもなろう。

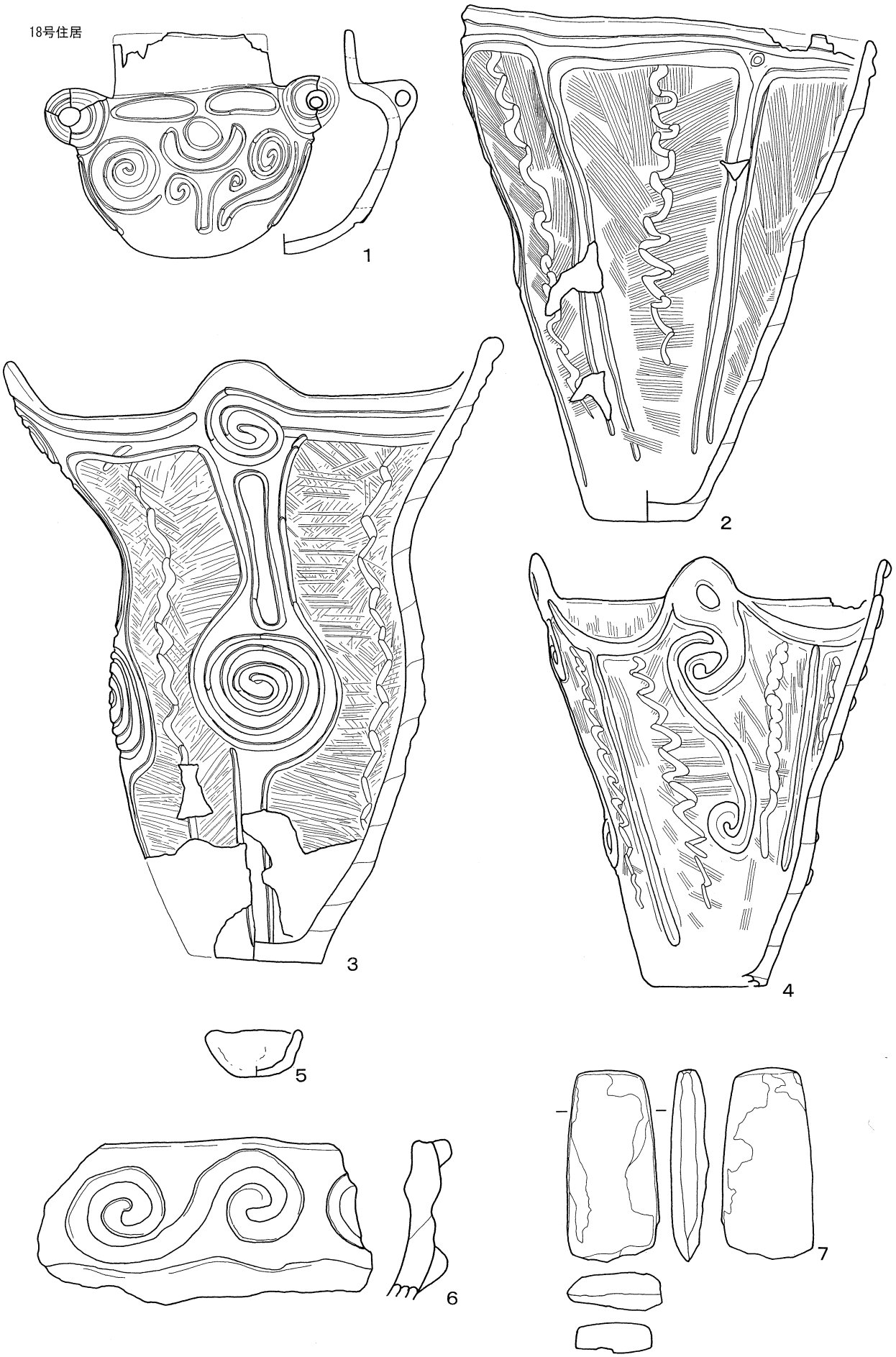



1層　10YR4/3（にぶい黄褐）に10YR3/3（暗褐）が30％、10YR3/2（黒褐）が10％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,495.57kpa）。
2層　10YR3/2（黒褐）に10YR3/3（暗褐）が30％、10YR4/3（にぶい黄褐）が10％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,635.81kpa）。
3層　10YR5/4（にぶい黄褐）に10YR3/2（黒褐）が30％混じる。シルト粒土。非常に固くしまる（土壌硬度2,397.81kpa）。
4層　10YR5/4（にぶい黄褐）に10YR3/3（暗褐）が10％、10YR4/3（にぶい黄褐）が30％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,064.06kpa）。
5層　10YR4/3（にぶい黄褐）に10YR3/3（暗褐）が30％、10YR4/4（褐）が10％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,495.57kpa）。
6層　10YR4/3（にぶい黄褐）に10YR3/3（暗褐）が50％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,495.57kpa）。
7層　10YR4/3（にぶい黄褐）に10YR3/3（暗褐）が20％、10YR4/4（褐）が10％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,156.25kpa）。
8層　10YR4/3（にぶい黄褐）に10YR3/3（暗褐）が10％混じる。シルト粒土。しまる（土壌硬度906.17kpa）。
9層　10YR4/4（褐）に10YR3/3（暗褐）が20％、10YR3/2（黒褐）が5％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度981.68kpa）。
10層　10YR4/4（褐）に10YR3/3（暗褐）が20％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,370.04kpa）。
11層　10YR3/1（黒褐）に10YR4/3（にぶい黄褐）が30％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,635.81kpa）。
地山　10YR5/4（にぶい黄褐）に10YR3/3（暗褐）が20％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,370.04kpa）。

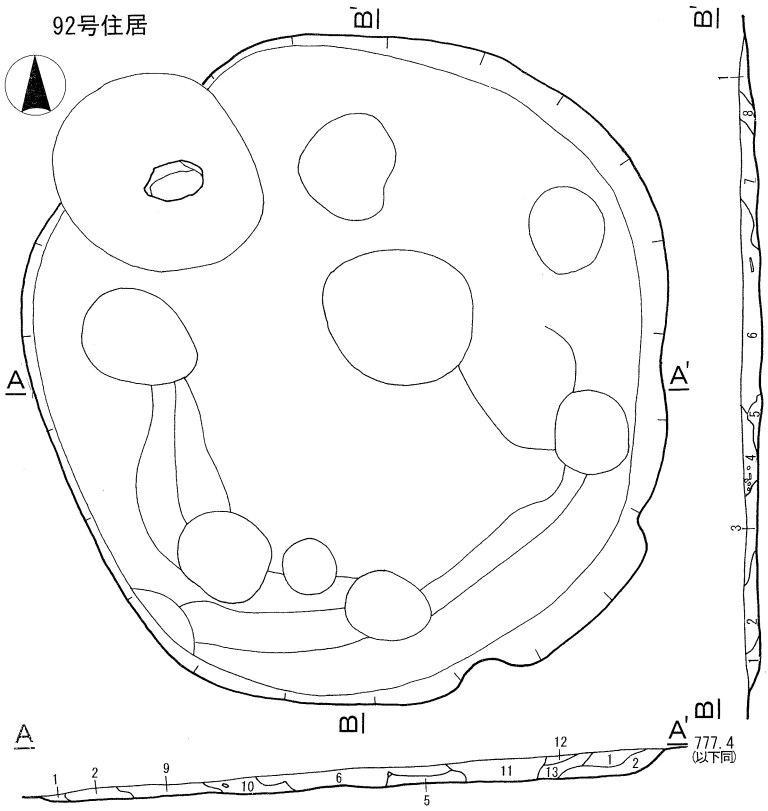



1層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が10％、炭化物が7％、焼土が3％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,370.04kpa）。
2層　10YR4/6（褐）に10YR3/4（暗褐）が10％、炭化物が3％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,064.06kpa）。
3層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が20％、炭化物が2％混じる。シルト粒土。しまる（土壌硬度906.17kpa）。
4層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が15％、炭化物が2％、焼土が1％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,635.81kpa）。
5層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が30％、炭化物が1％、焼土が3％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,064.06kpa）。
6層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が20％、炭化物が1％、焼土が1％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,793.70kpa）。
7層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が15％、炭化物が1％、焼土が1％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度981.68kpa）。
8層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が5％、炭化物が10％、焼土が1％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,064.06kpa）。
9層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が20％、炭化物が3％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度983.68kpa）。
10層　10YR3/4（暗褐）に10YR4/6（褐）が15％、炭化物が1％混じる。シルト粒土。しまる（土壌硬度774.75kpa）。
11層　10YR4/6（褐）に10YR3/4（暗褐）が20％混じる。シルト粒土。しまる（土壌硬度774.75kpa）。
地山　10YR4/6（褐）に10YR3/4（暗褐）が10％混じる。シルト粒土。固くしまる（土壌硬度1,064.06kpa）。

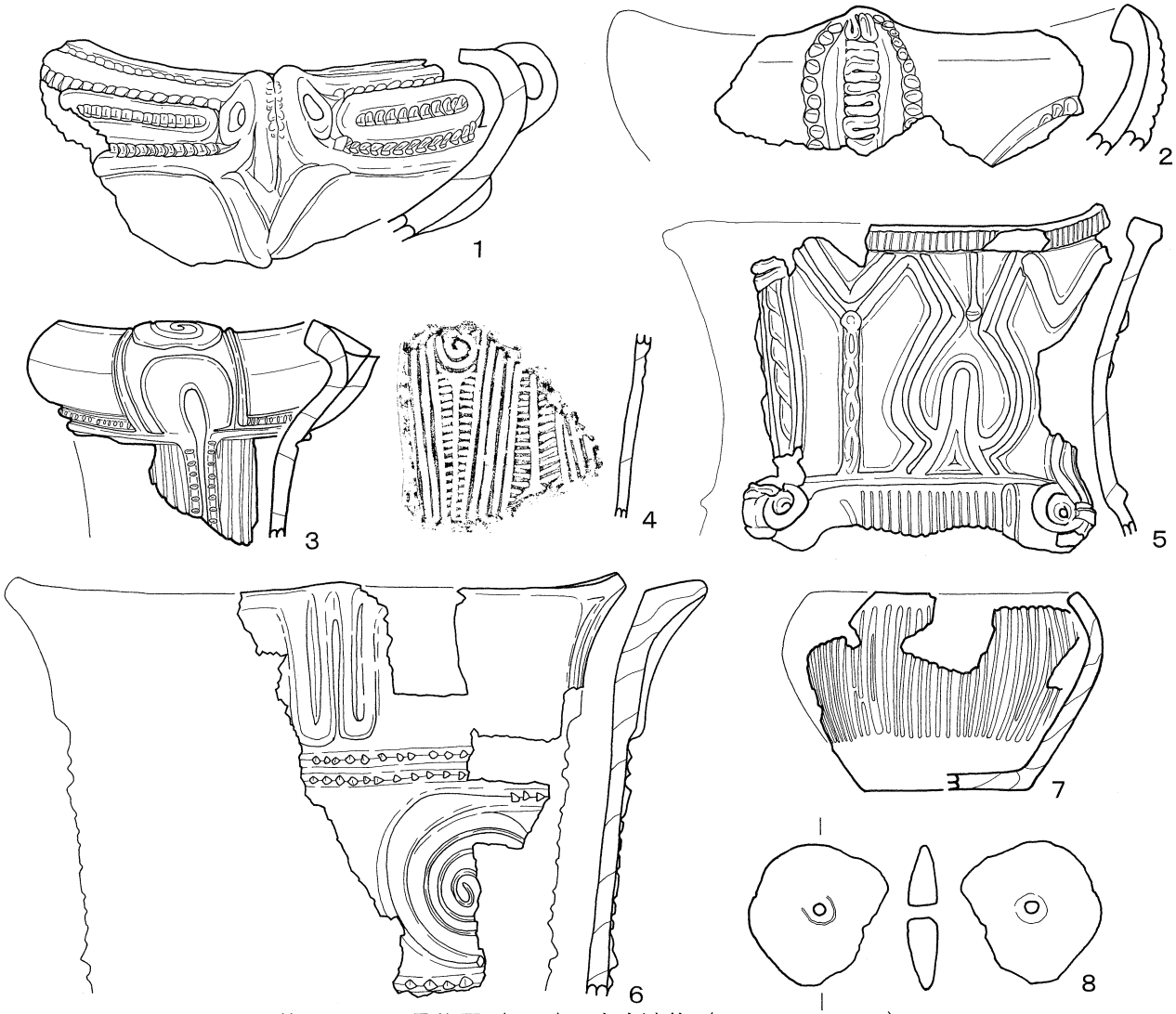
第6図　14号、18号住居（1/60）



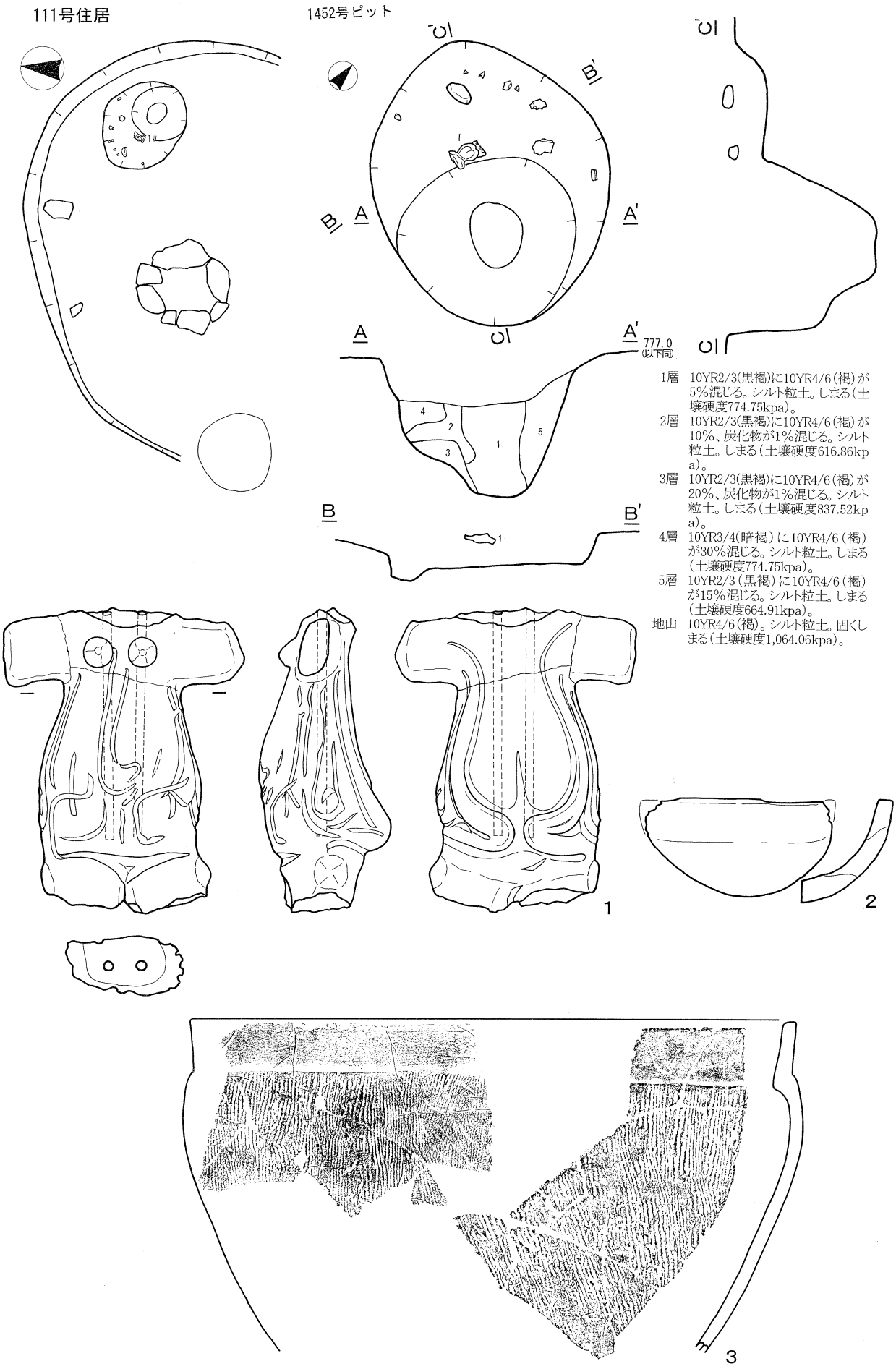

第７図　出土遺物（1/2、１～４ ７1/4）




1層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度906.17kpa)。
2層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が20%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度906.17kpa)。
3層　10YR3/4(暗褐)に10YR5/6(黄褐)が10%、炭化物が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,064.06kpa)。
4層　10YR2/3(黒褐)に10YR5/6(黄褐)が5%、炭化物が5%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度981.68kpa)。
5層　10YR4/6(褐)に10YR5/6(黄褐)が30%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度906.17kpa)。
6層　10YR2/3(黒褐)に10YR4/6(褐)が5%、炭化物が3%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度717.87kpa)。
7層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が5%、炭化物が5%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度774.75kpa)。
8層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,257.26kpa)。
9層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が20%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度906.17kpa)。
10層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が10%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度717.87kpa)。
11層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%、炭化物が5%、焼土が3%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度837.52kpa)。
12層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度906.17kpa)。
13層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が5%、炭化物が3%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度837.52kpa)。
地山　10YR4/6(褐)に10YR5/6(黄褐)が30%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度981.68kpa)。

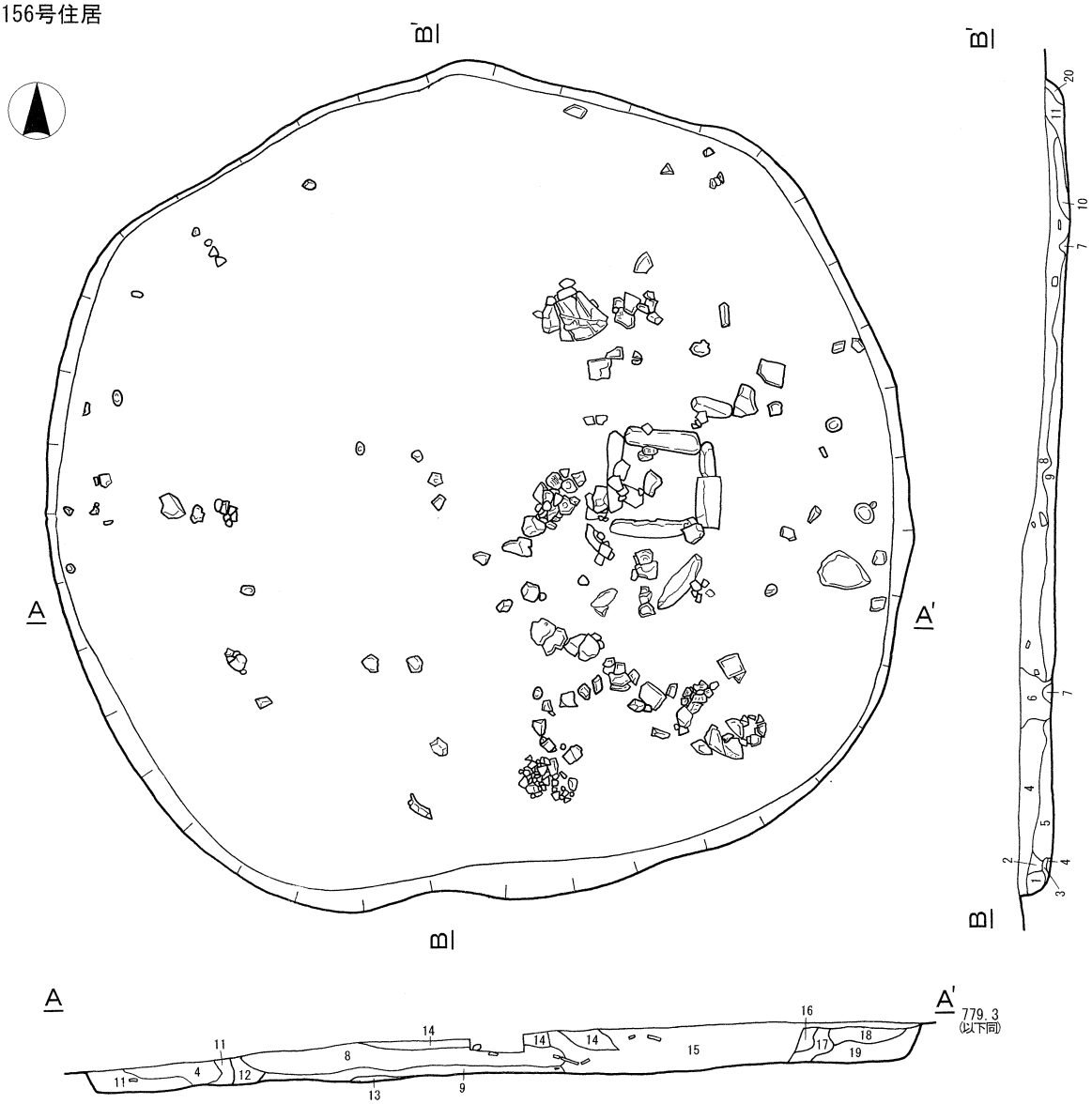



第8図　92号住居(1/60)・出土遺物(1/2、3～7 1/4)



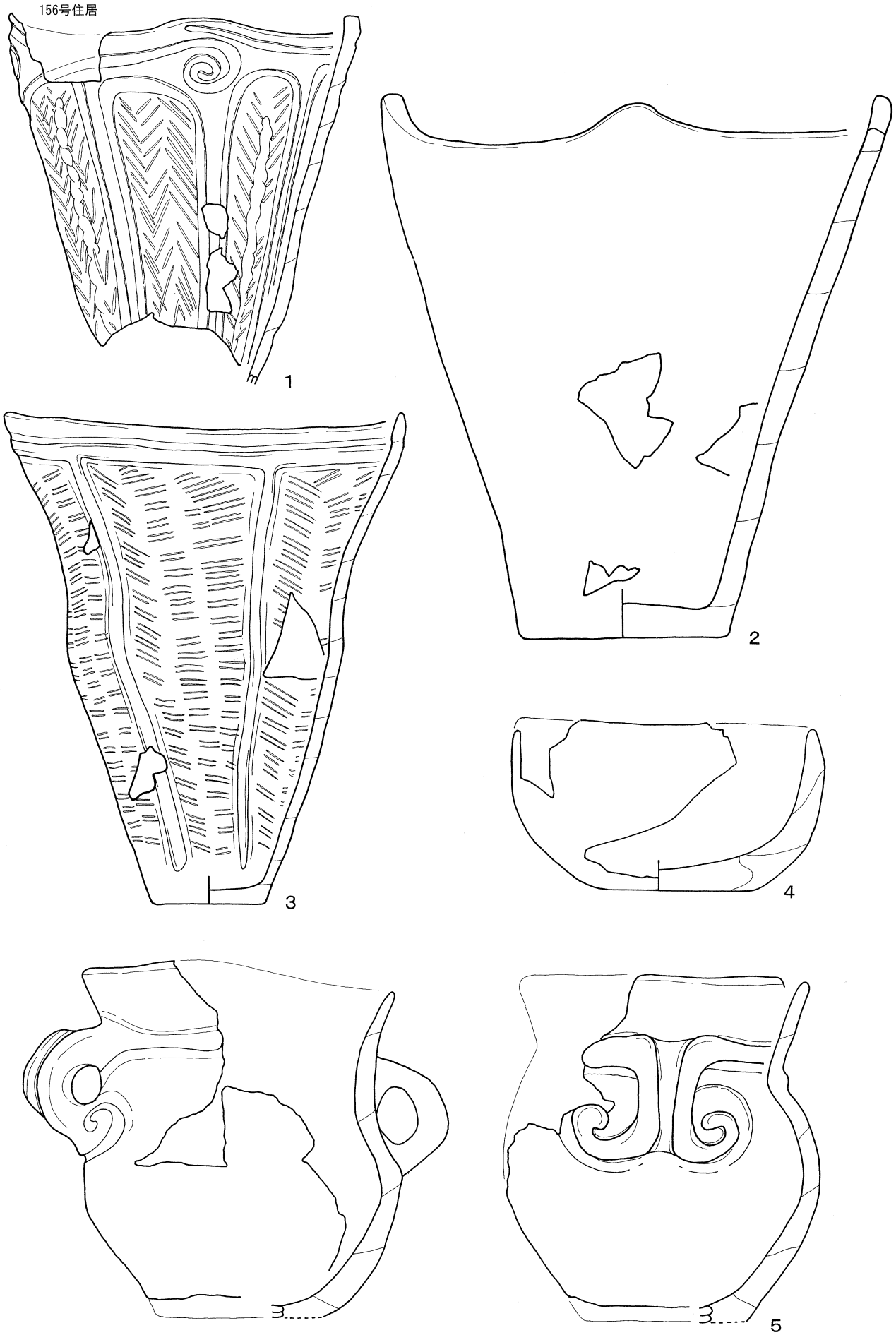

第9図　111号住居（1/60）1452号ピット（1/20）　出土遺物（1/2、3 1/4）

156号住居

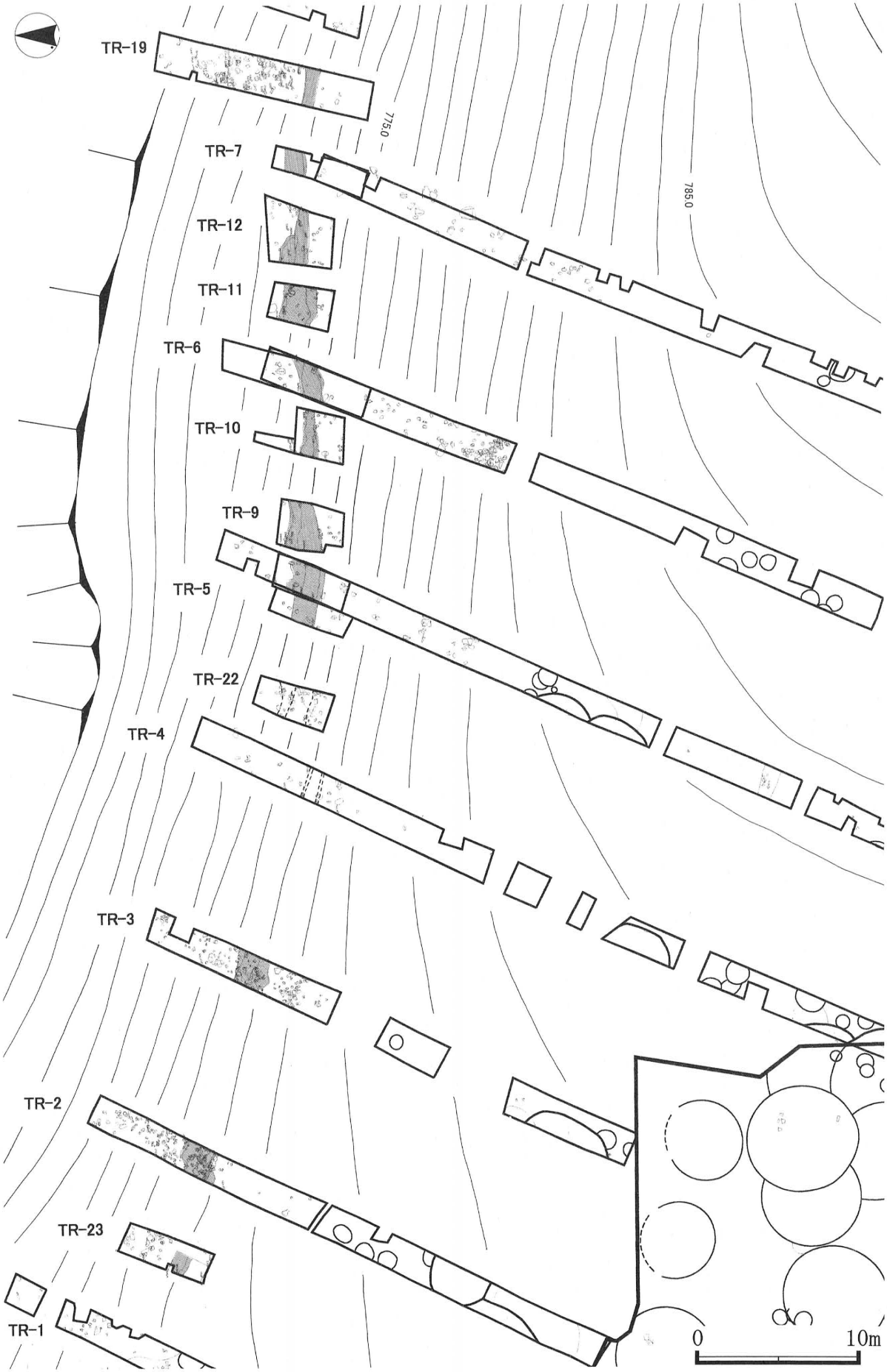



1層　10YR4/6(褐)に10YR3/4(暗褐)が3%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,370.04kpa)。
2層　10YR4/6(褐)に10YR3/4(暗褐)が5%、炭化物が1%混じる。シルト粒土。しまる(土壌硬度906.17kpa)。
3層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が5%混じる。シルト粒土。ややしまる(土壌硬度342.26kpa)。
4層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%、10YR5/6(黄褐)が2～10mmの粒で3%、炭化物が2%、焼土が2%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,635.81kpa)。
5層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が15%、10YR5/6(黄褐)が2～10mmの粒で2%、炭化物が2%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,495.57kpa)。
6層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が20%、炭化物が2%、焼土が1%混じる。シルト粒土。非常に固くしまる(土壌硬度1,970.23kpa)。
7層　10YR4/6(褐)に炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,635.81kpa)。
8層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が15%、炭化物が3%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,793.70kpa)。
9層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が20%、炭化物が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,793.70kpa)。
10層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,257.26kpa)。
11層　10YR4/6(褐)に10YR3/4(暗褐)が3%、炭化物が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,495.57kpa)。
12層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,793.70kpa)。
13層　10YR4/6(褐)に10YR3/4(暗褐)が10%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,370.04kpa)。
14層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が10%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。非常に固くしまる(土壌硬度2,397.81kpa)。
15層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%、10YR5/6(黄褐)が2～10mmの粒で10%、炭化物が15%、焼土が3%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,793.70kpa)。
16層　10YR3/4(暗褐)に10YR5/6(黄褐)が10%、炭化物が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,793.70kpa)。
17層　10YR3/4(暗褐)に10YR5/6(黄褐)が5%、炭化物が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,635.81kpa)。
18層　10YR3/4(暗褐)に10YR5/6(黄褐)が20%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,370.04kpa)。
19層　10YR3/4(暗褐)に10YR5/6(黄褐)が10%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,495.57kpa)。
20層　10YR4/6(褐)に10YR3/4(暗褐)が1%混じる。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,495.57kpa)。
壁　10YR4/6(褐)。シルト粒土。固くしまる(土壌硬度1,064.06kpa)。
地山　10YR5/8(黄褐)。シルト粒土。非常に固くしまる(土壌硬度2,170.29kpa)。

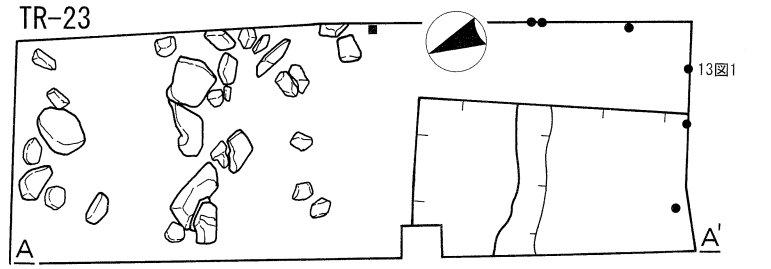
第10図　156号住居（1/60）



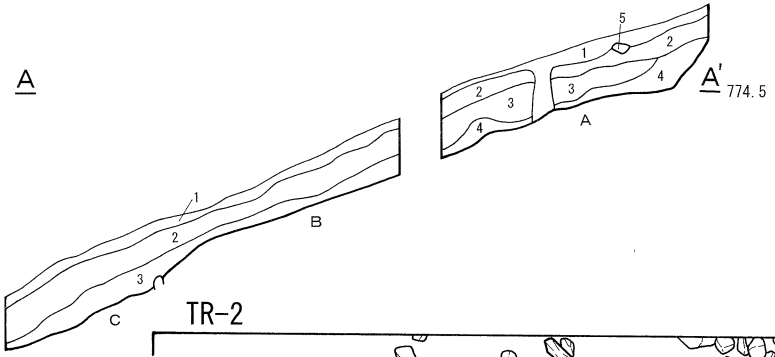

第 11 図　出土遺物（1/2、1 3 1/4）



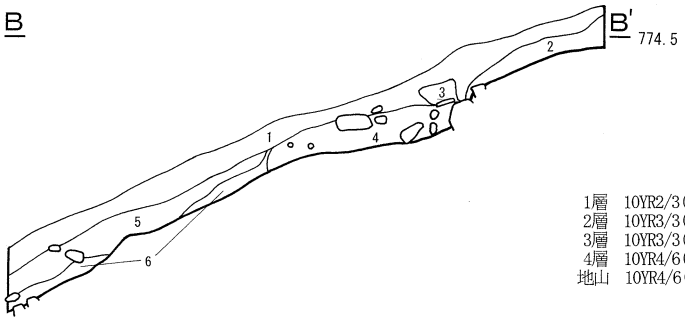

第 12 図　道路状遺構位置図




出土遺物凡例
- ● 土器
- ▲ 石器
- ■ 石材
- ✸ 炭化物

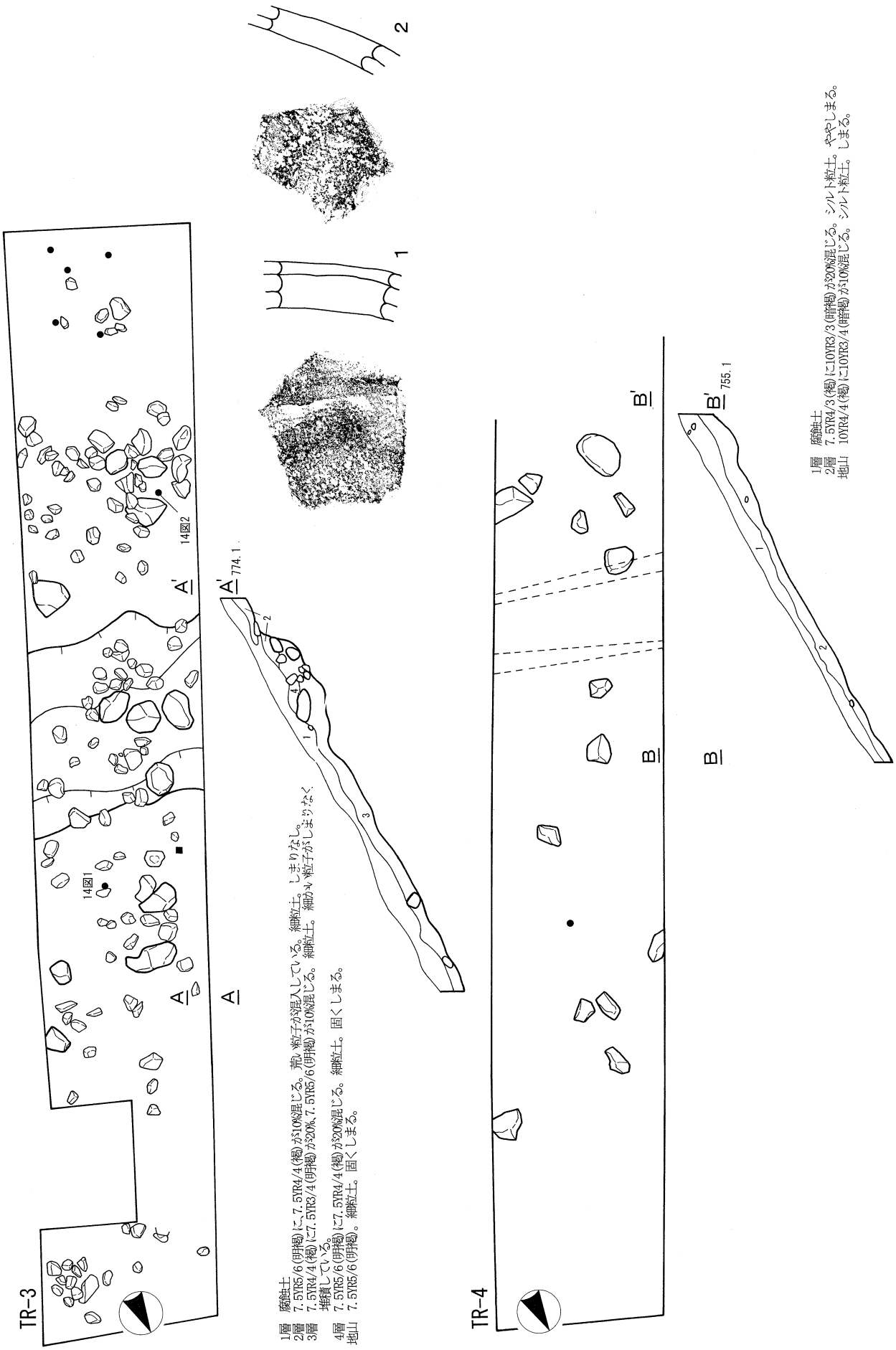



1層　腐蝕土
2層　10YR4/6(褐)に、10YR3/4(暗褐)が5%混じる。シルト粒土。ややしまる。
3層　10YR4/6(褐)に、10YR3/4(暗褐)が10%混じる。シルト粒土。ややしまる。
4層　10YR3/4(暗褐)に、10YR4/6(褐)が10%混じる。細かゝ粒子が堆積している。しまりなし。
5層　10YR2/3(黒褐)に、10YR4/6(褐)が1%混じる。シルト粒土。ややしまる。
6層　7.5YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が1%混じる。シルト粒土。しまる。
地山A　10YR4/6(褐)に、10YR3/4(暗褐)が2%混じる。シルト粒土。非常に固くしまる。
地山B　7.5YR4/6(褐)に、10YR3/4(暗褐)が2%混じる。シルト粒土。非常に固くしまる。
地山C　10YR4/6(褐)に、10YR3/4(暗褐)が3%混じる。シルト粒土。固くしまる。

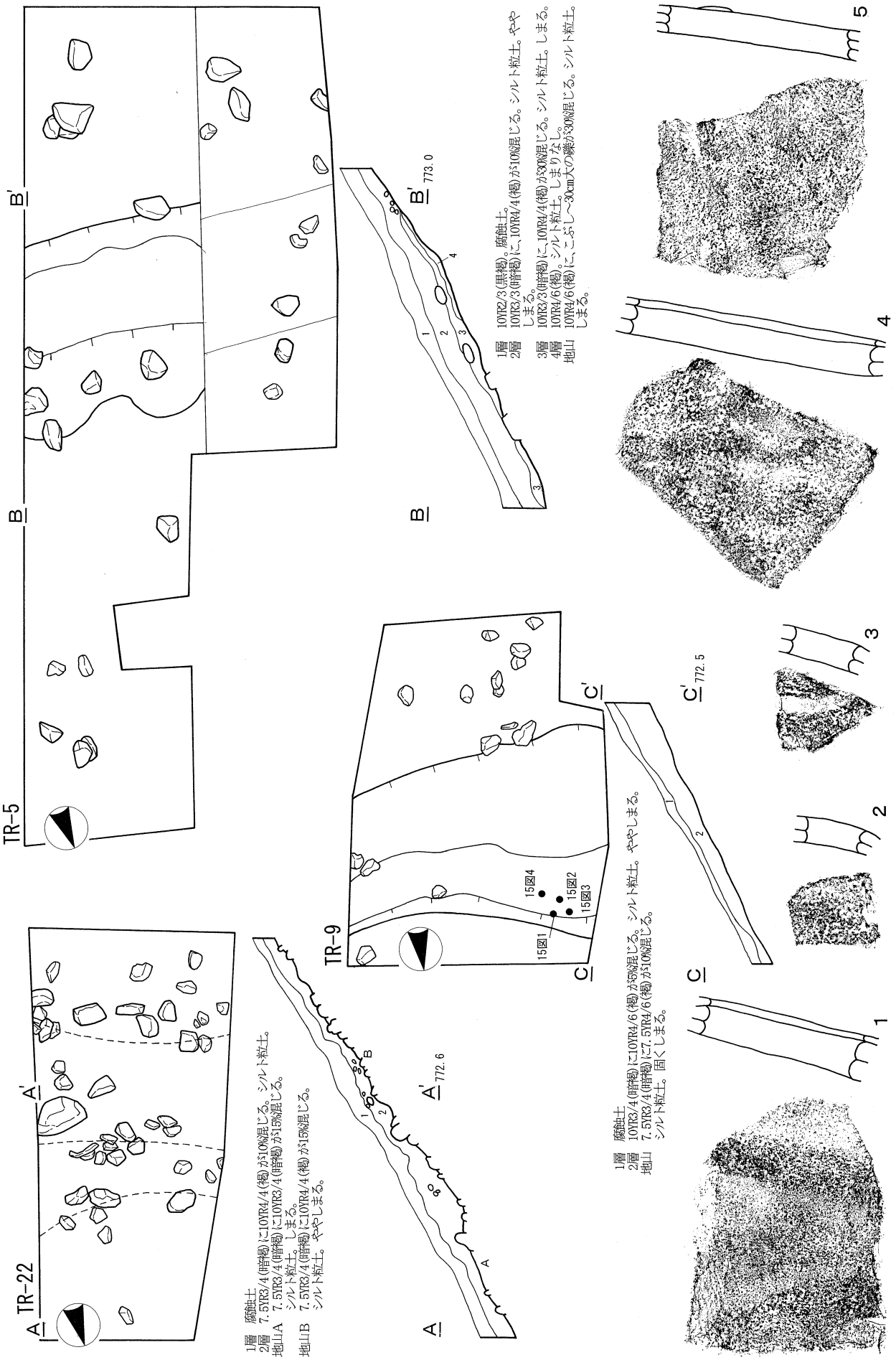



1層　10YR2/3(黒褐)。腐蝕土。
2層　10YR3/3(暗褐)に、10YR4/4(褐)が10%混じる。シルト粒土。ややしまる。
3層　10YR3/3(暗褐)に、10YR4/4(褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。
4層　10YR4/6(褐)。シルト粒土。しまりなし。
地山　10YR4/6(褐)に、こぶし～30cm大の礫が30%混じる。シルト粒土。固くしまる。

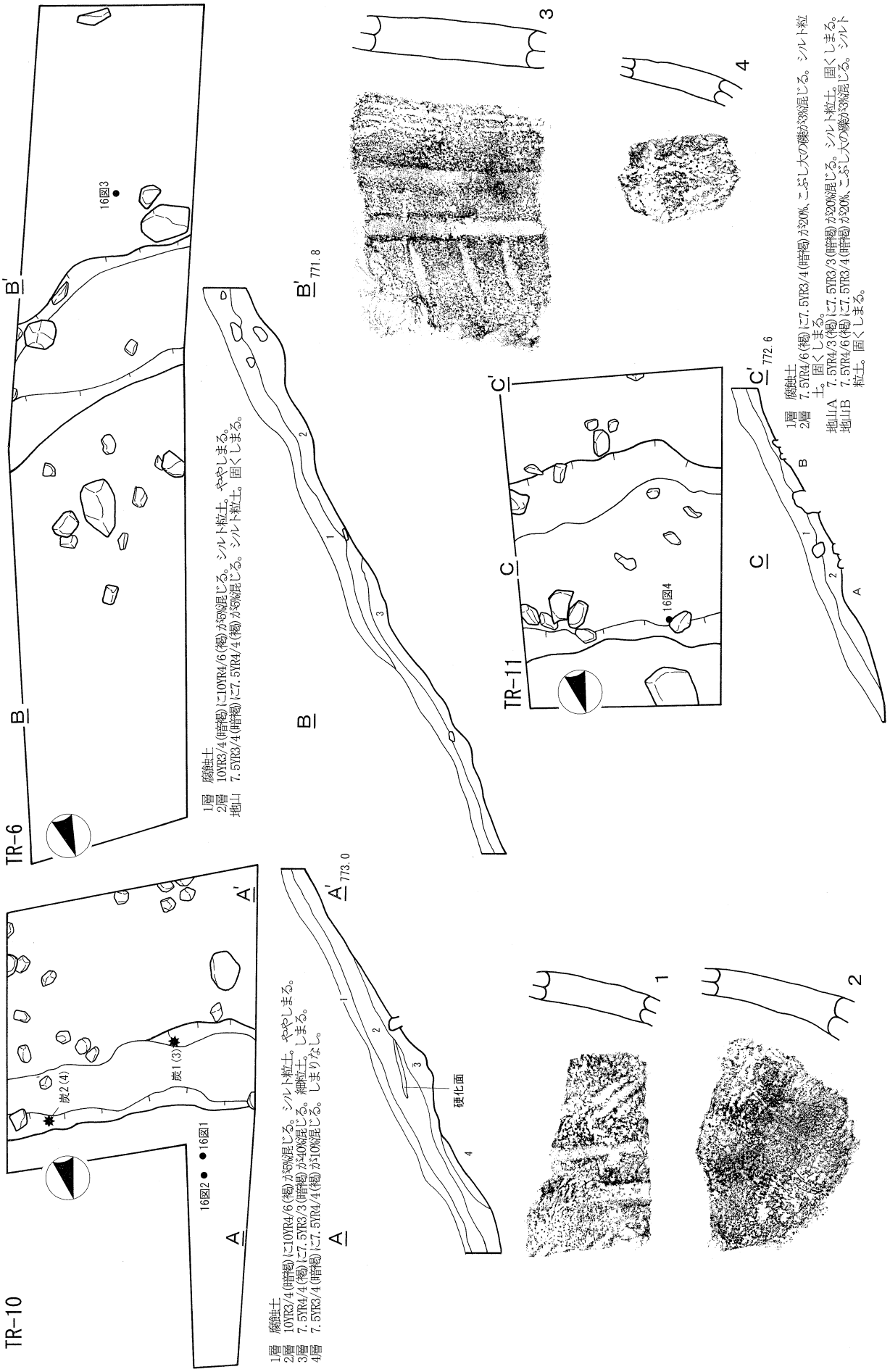
第13図　TR-23、TR-2（1/60）出土遺物（1/2）



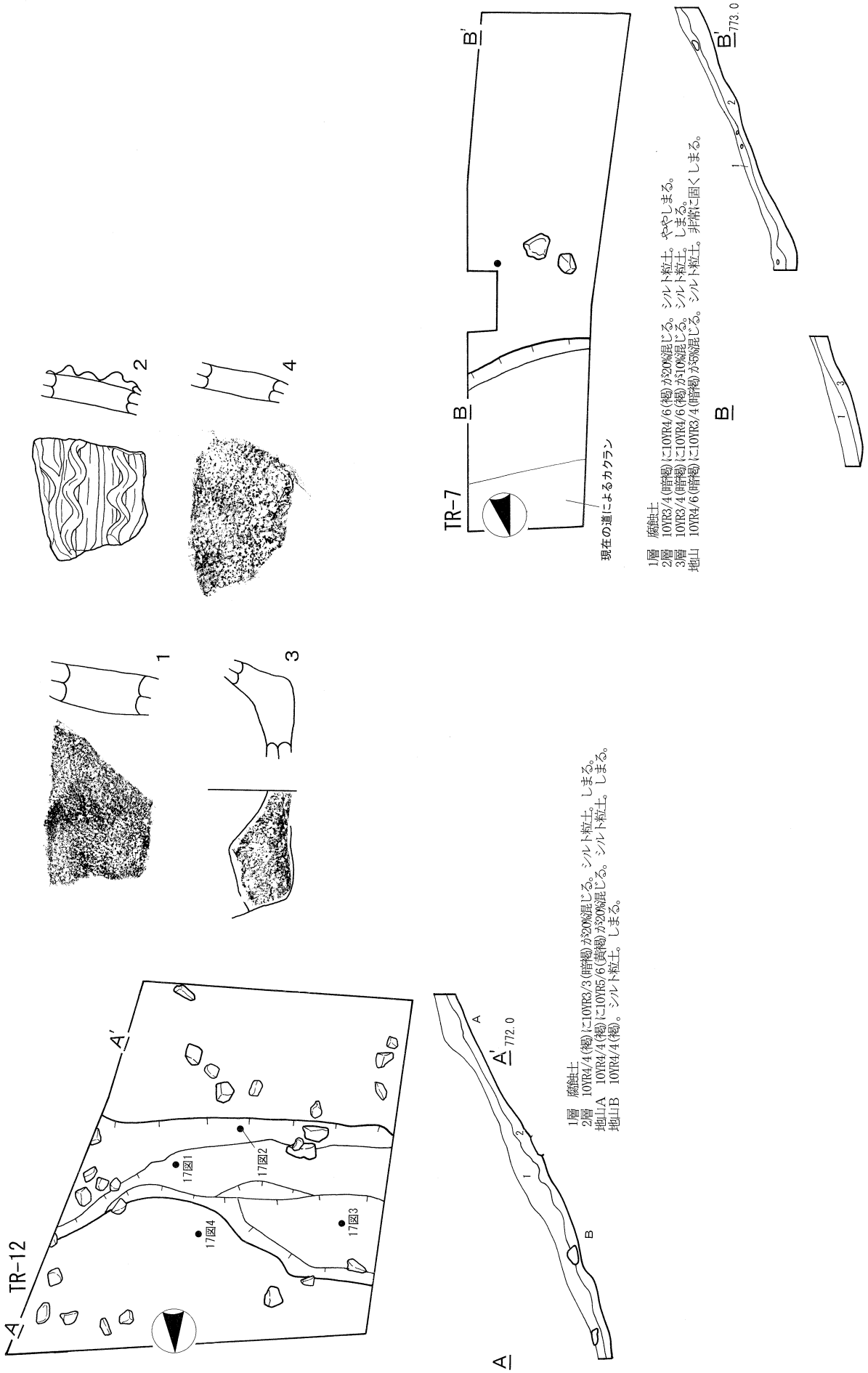

第14図　TR-3、TR-4（1/60）出土遺物（1/2）



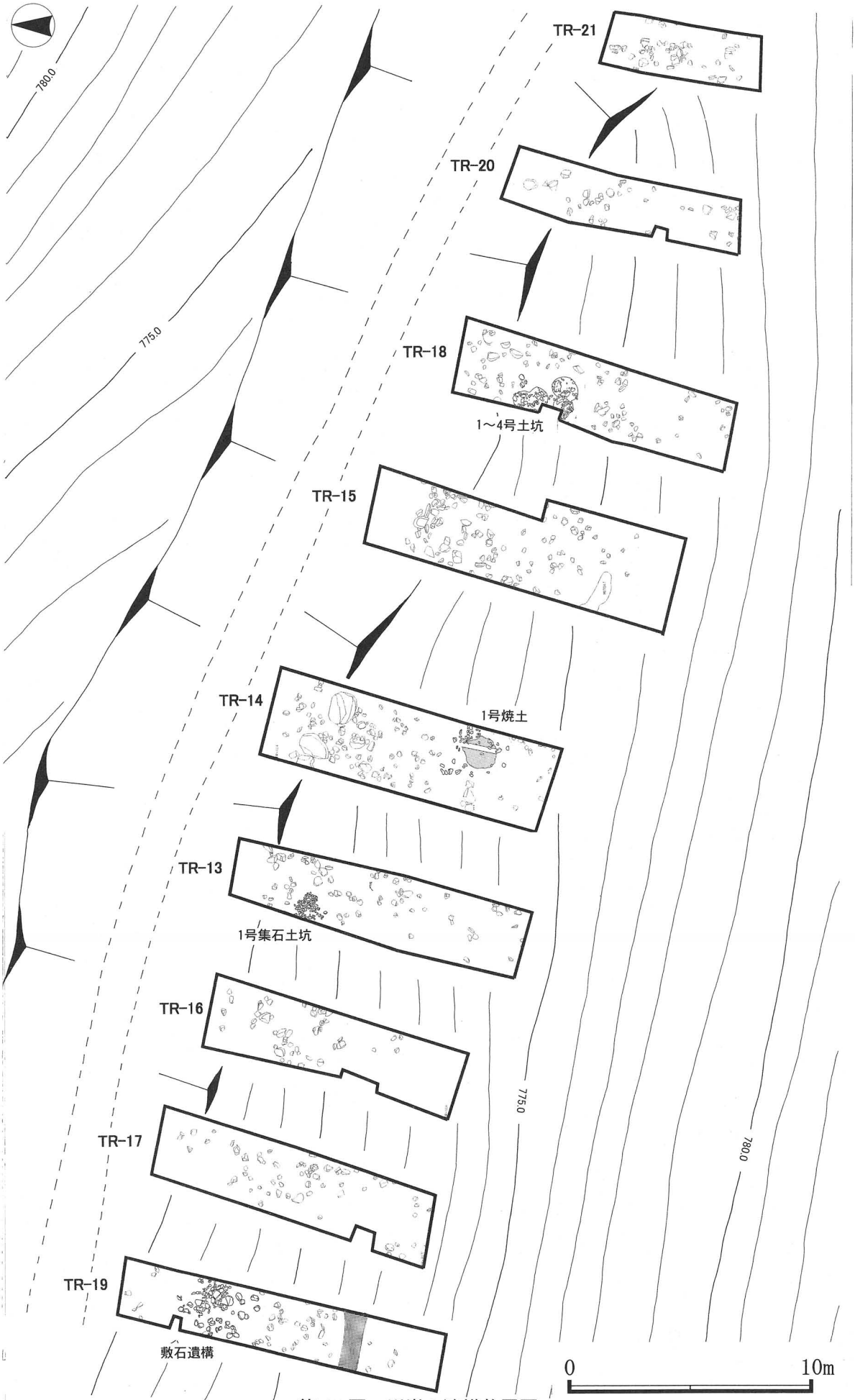

第15図　TR-22、TR-5、TR-9（1/60）出土遺物（1/2）



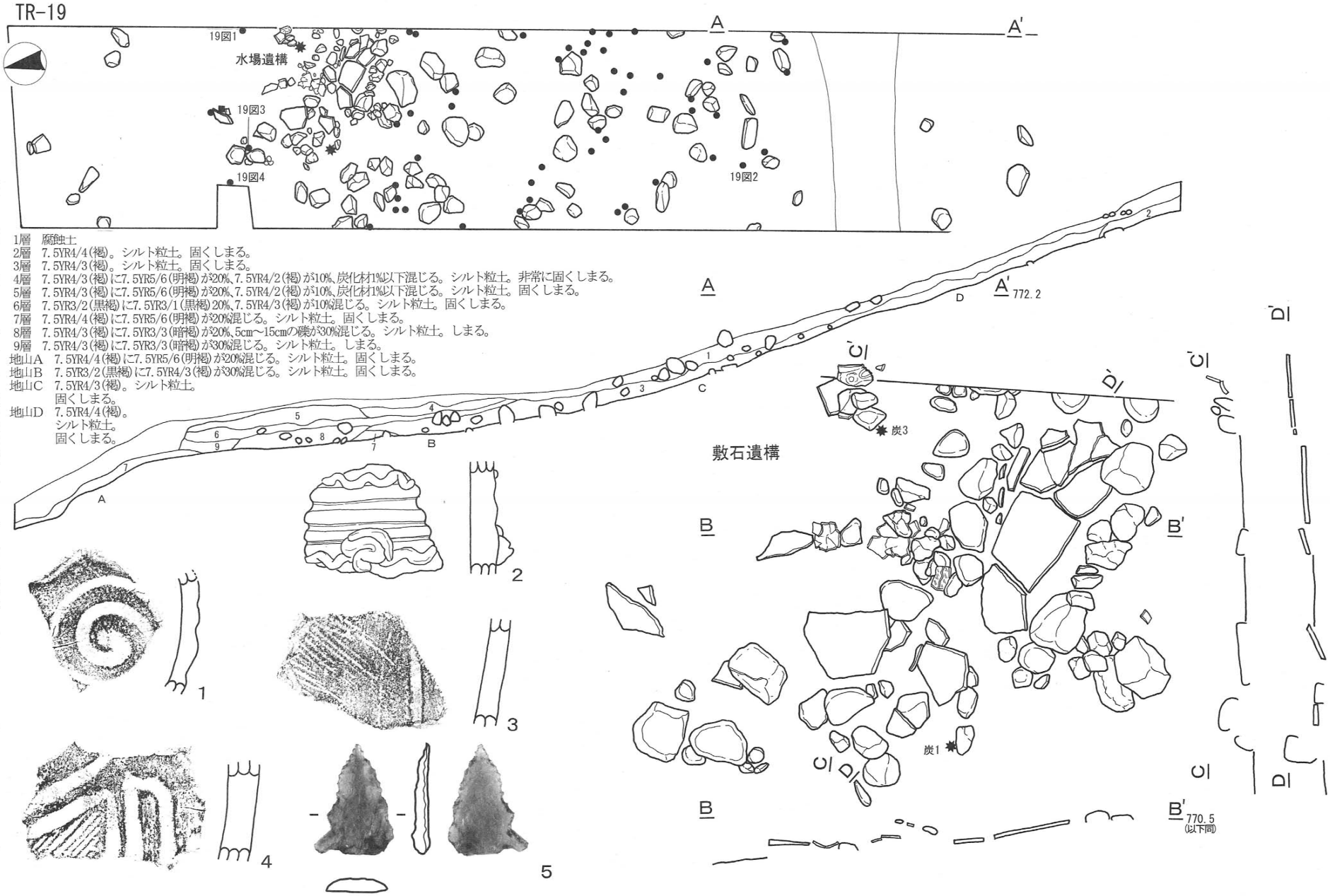

第16図　TR-10、TR-6、TR-11（1/60）出土遺物（1/2）



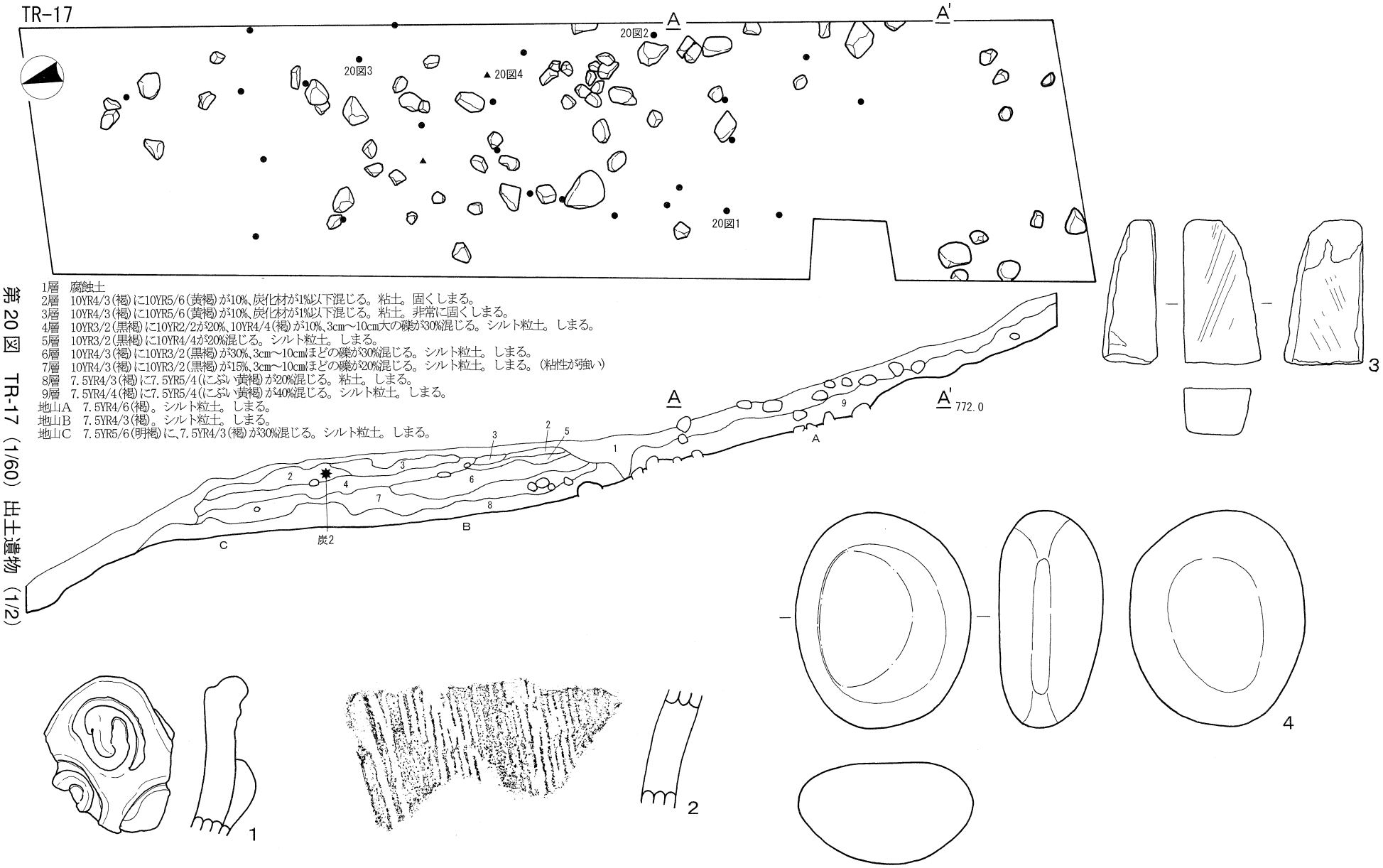

第17図　TR-12、TR-7、(1/60) 出土遺物 (1/2)




第18図　川岸の遺構位置図

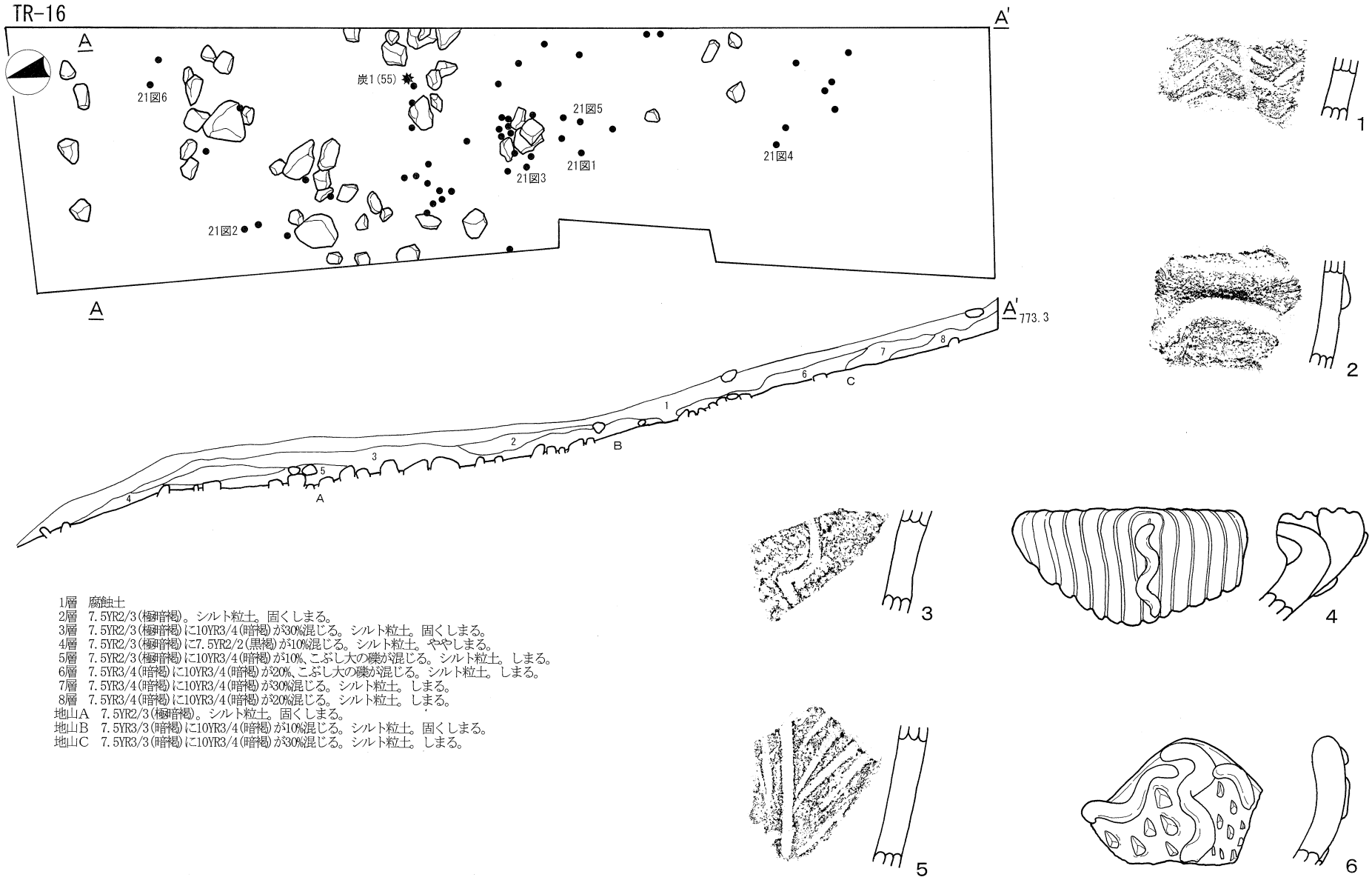



第19図　TR-19（1/60）敷石遺構（1/20）出土遺物（1/2、5 1/1）



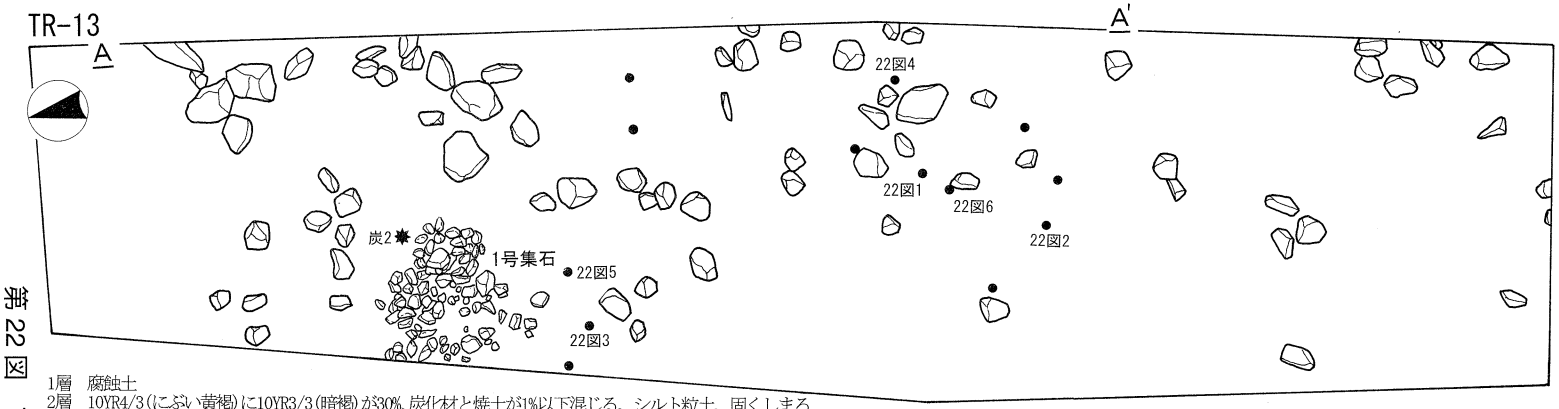

1層　廃蝕土
2層　10YR4/3(褐)に10YR5/6(黄褐)が10%、炭化材が1%以下混じる。粘土。固くしまる。
3層　10YR4/3(褐)に10YR5/6(黄褐)が10%、炭化材が1%以下混じる。粘土。非常に固くしまる。
4層　10YR3/2(黒褐)に10YR2/2が20%、10YR4/4(褐)が10%、3cm～10cm大の礫が30%混じる。シルト粒土。しまる。
5層　10YR3/2(黒褐)に10YR4/4が20%混じる。シルト粒土。しまる。
6層　10YR4/3(褐)に10YR3/2(黒褐)が30%、3cm～10cmほどの礫が30%混じる。シルト粒土。しまる。
7層　10YR4/3(褐)に10YR3/2(黒褐)が15%、3cm～10cmほどの礫が20%混じる。シルト粒土。しまる。(粘性が弱い)
8層　7.5YR4/3(褐)に7.5YR5/4(にぶい黄褐)が20%混じる。粘土。しまる。
9層　7.5YR4/4(褐)に7.5YR5/4(にぶい黄褐)が40%混じる。シルト粒土。しまる。
地山A　7.5YR4/6(褐)。シルト粒土。しまる。
地山B　7.5YR4/3(褐)。シルト粒土。しまる。
地山C　7.5YR5/6(明褐)に、7.5YR4/3(褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。

第20図　TR-17（1/60）出土遺物（1/2）

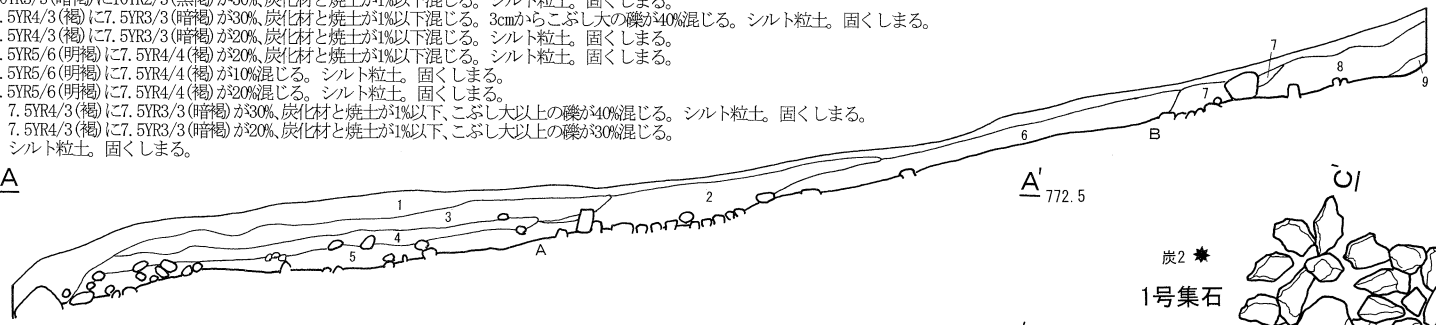


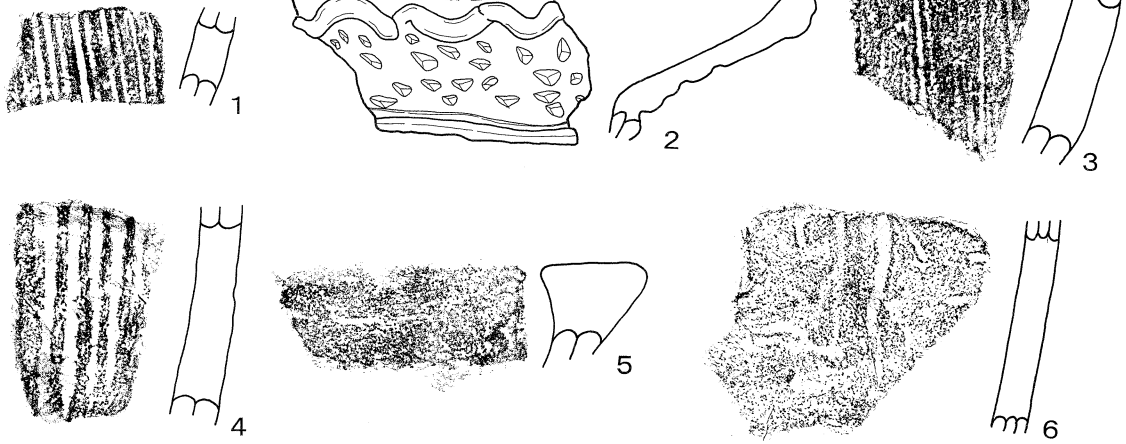

1層　腐蝕土
2層　7.5YR2/3(極暗褐)。シルト粒土。固くしまる。
3層　7.5YR2/3(極暗褐)に10YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。固くしまる。
4層　7.5YR2/3(極暗褐)に7.5YR2/2(黒褐)が10%混じる。シルト粒土。ややしまる。
5層　7.5YR2/3(極暗褐)に10YR3/4(暗褐)が10%、こぶし大の礫が混じる。シルト粒土。しまる。
6層　7.5YR3/4(暗褐)に10YR3/4(暗褐)が20%、こぶし大の礫が混じる。シルト粒土。しまる。
7層　7.5YR3/4(暗褐)に10YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。
8層　7.5YR3/4(暗褐)に10YR3/4(暗褐)が20%混じる。シルト粒土。しまる。
地山A　7.5YR2/3(極暗褐)。シルト粒土。固くしまる。
地山B　7.5YR3/3(暗褐)に10YR3/4(暗褐)が10%混じる。シルト粒土。固くしまる。
地山C　7.5YR3/3(暗褐)に10YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。

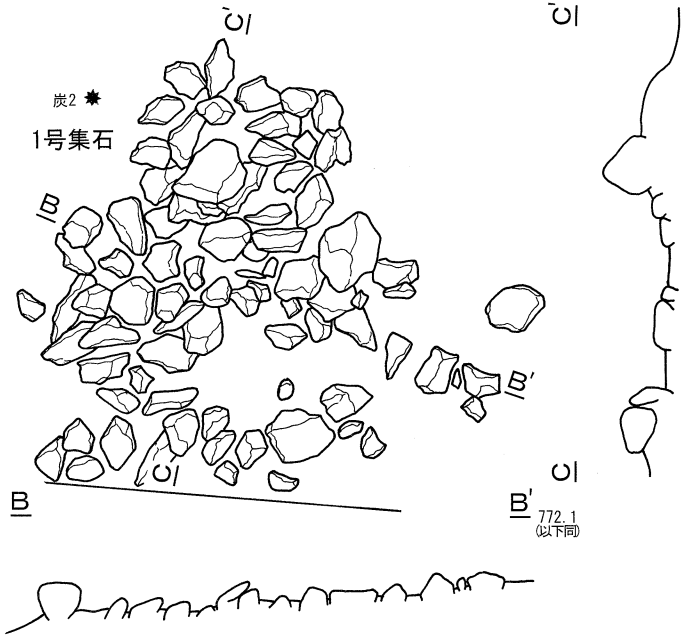
第21図　TR-16 (1/60) 出土遺物 (1/2)



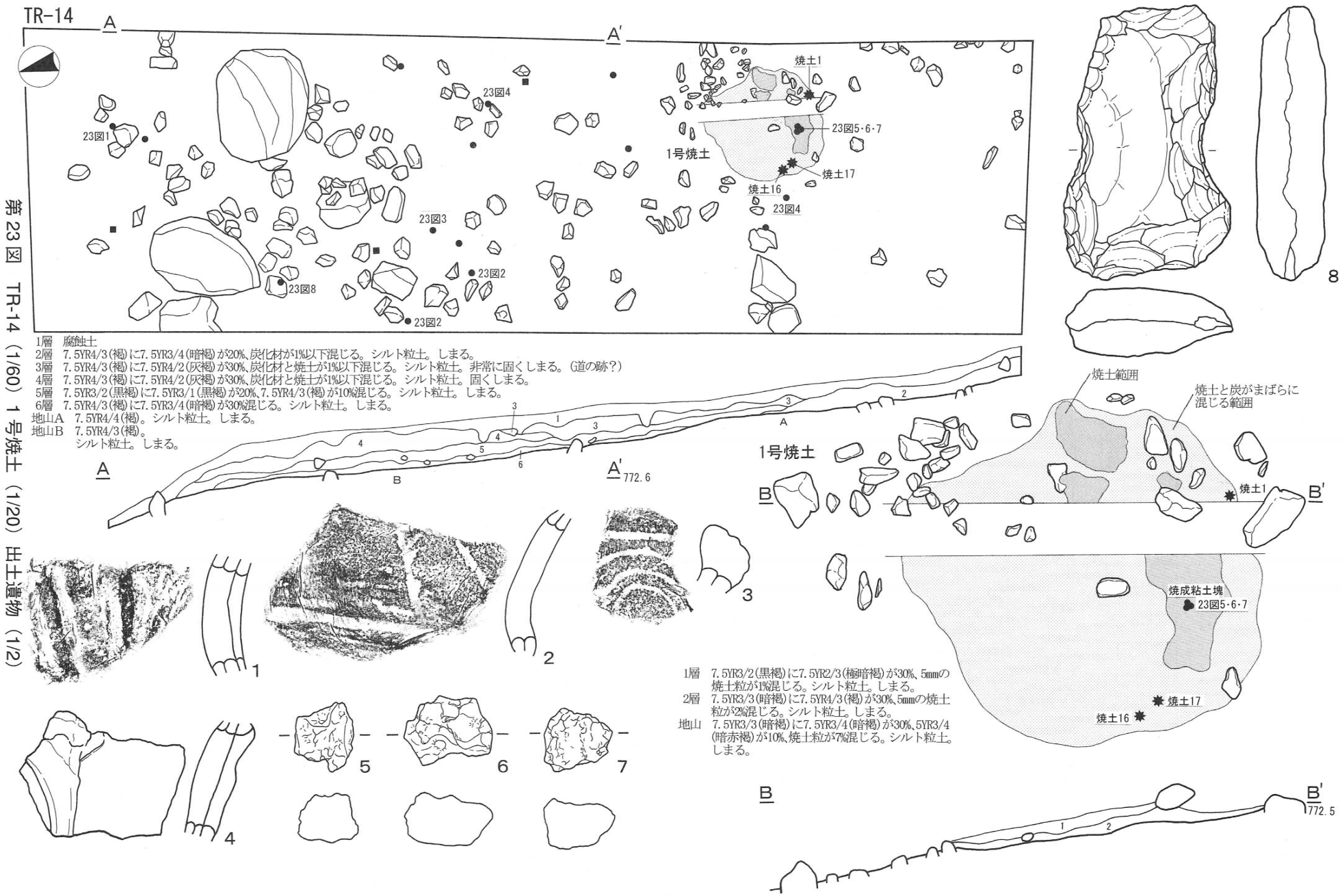

1層　腐蝕土
2層　10YR4/3(にぶい黄褐)に10YR3/3(暗褐)が30%、炭化材と焼土が1%以下混じる。シルト粒土。固くしまる。
3層　10YR4/3(にぶい黄褐)に10YR3/3(暗褐)が30%、炭化材と焼土が1%以下混じる。シルト粒土。非常に固くしまる。(粘土 最近の道)
4層　10YR3/3(暗褐)に10YR2/3(黒褐)が30%、炭化材と焼土が1%以下混じる。シルト粒土。固くしまる。
5層　7.5YR4/3(褐)に7.5YR3/3(暗褐)が30%、炭化材と焼土が1%以下混じる。3cmからこぶし大の礫が40%混じる。シルト粒土。固くしまる。
6層　7.5YR4/3(褐)に7.5YR3/3(暗褐)が20%、炭化材と焼土が1%以下混じる。シルト粒土。固くしまる。
7層　7.5YR5/6(明褐)に7.5YR4/4(褐)が20%、炭化材と焼土が1%以下混じる。シルト粒土。固くしまる。
8層　7.5YR5/6(明褐)に7.5YR4/4(褐)が10%混じる。シルト粒土。固くしまる。
9層　7.5YR5/6(明褐)に7.5YR4/4(褐)が20%混じる。シルト粒土。固くしまる。
地山A　7.5YR4/3(褐)に7.5YR3/3(暗褐)が30%、炭化材と焼土が1%以下、こぶし大以上の礫が40%混じる。シルト粒土。固くしまる。
地山B　7.5YR4/3(褐)に7.5YR3/3(暗褐)が20%、炭化材と焼土が1%以下、こぶし大以上の礫が30%混じる。シルト粒土。固くしまる。



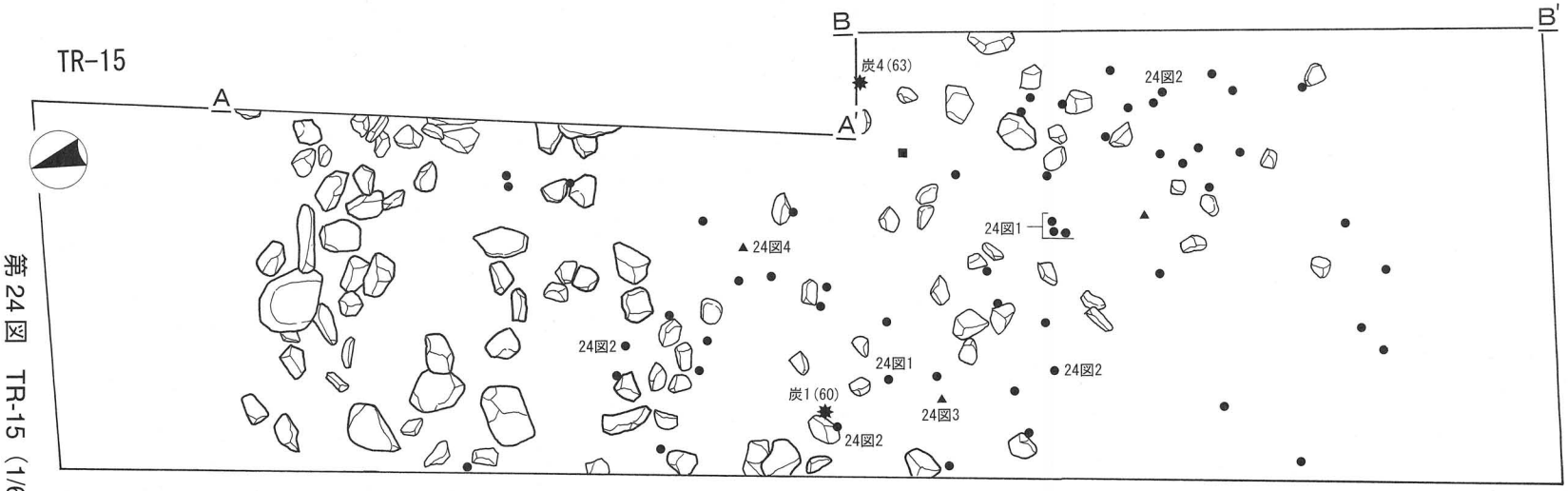



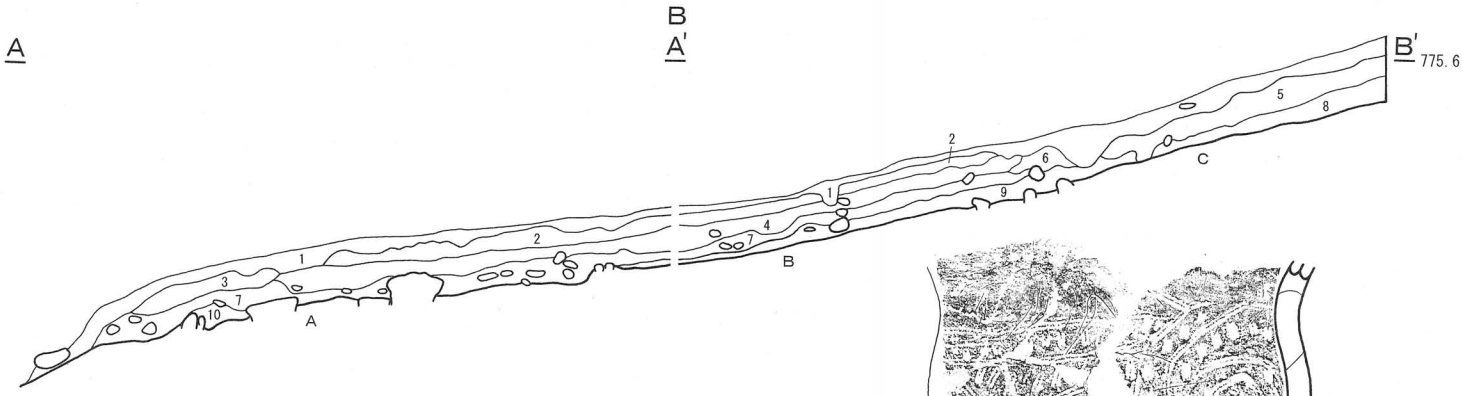




第22図　TR-13 (1/60) 1号集石 (1/20) 出土遺物 (1/2)

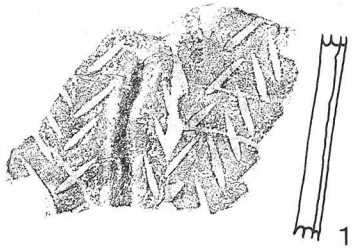


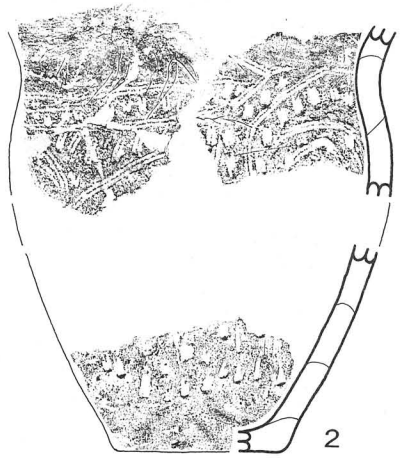

第23図　TR-14（1/60）1号焼土（1/20）出土遺物（1/2）

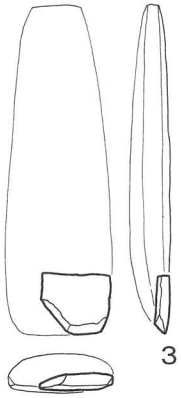


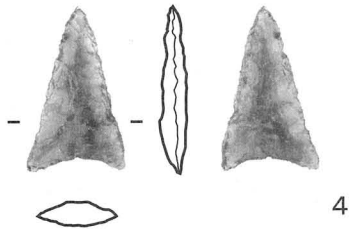




1層　腐蝕土
2層　10YR4/4(褐)に7.5YR3/3(暗褐)が20%混じる。シルト粒土。固くしまる。(最近の道の跡?)
3層　7.5YR2/3(極暗褐)に10YR3/4(明褐)が30%混じる。シルト粒土。ややしまる。
4層　7.5YR2/3(極暗褐)に10YR3/4(暗褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
5層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が30%混じる。シルト粒土。ややしまる。
6層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が10%混じる。シルト粒土。ややしまる。
7層　10YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が30%、こぶし大の礫が混じる。シルト粒土。しまる。
8層　10YR4/4(褐)に10YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。
9層　10YR3/4(暗褐)に7.5YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。固くしまる。
10層　10YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
地山A　7.5YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。
地山B　10YR3/4(暗褐)。シルト粒土。しまる。
地山C　10YR4/4(褐)に10YR3/4(暗褐)が30%混じる。
シルト粒土。しまる。



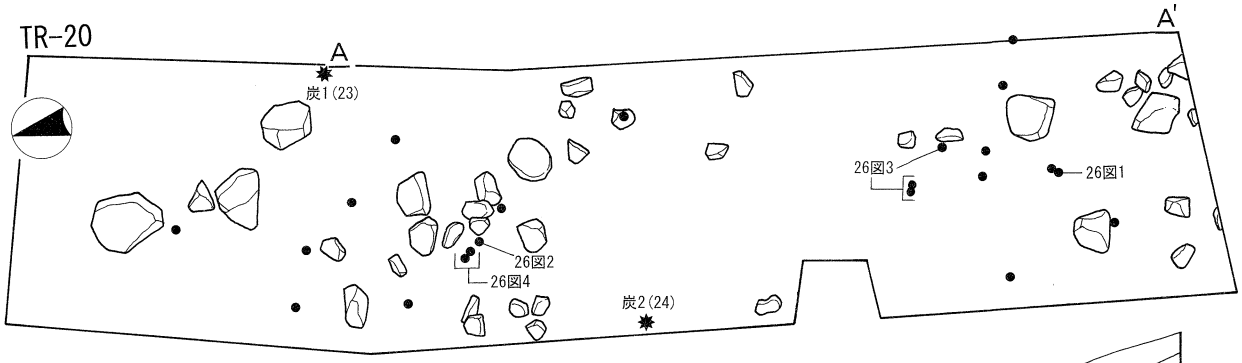



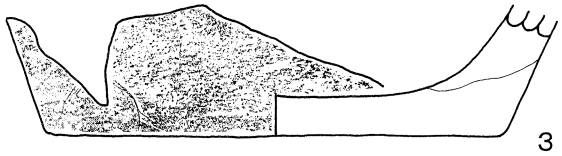



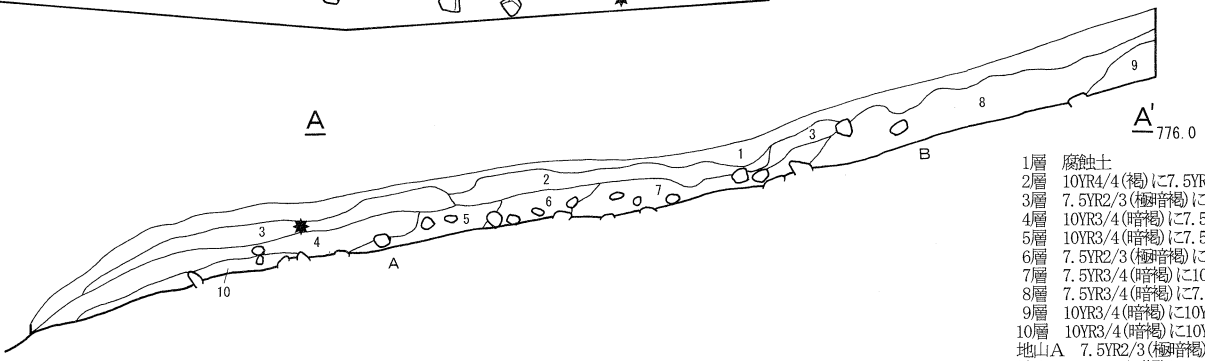

第24図　TR-15 (1/60) 出土遺物 (1/2、2 3 1/4、4 1/1)

1層　腐蝕土
2層　10YR4/4(褐)に7.5YR3/3(暗褐)が20%混じる。シルト粒土。固くしまる。(最近の道の砂?)
3層　10YR4/4(褐)に7.5YR3/3(暗褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
4層　7.5YR2/3(極暗褐)に10YR3/4(暗褐)が10%混じる。シルト粒土。ややしまる。
5層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
6層　10YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
7層　10YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。
8層　7.5YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が10%、こぶし大の礫が混じる。シルト粒土。しまる。
9層　10YR3/4(暗褐)に7.5YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。固くしまる。
10層　7.5YR2/3(極暗褐)に10YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。ややしまる。
地山A　7.5YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。
地山B　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
地山C　10YR4/4(褐)に10YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。

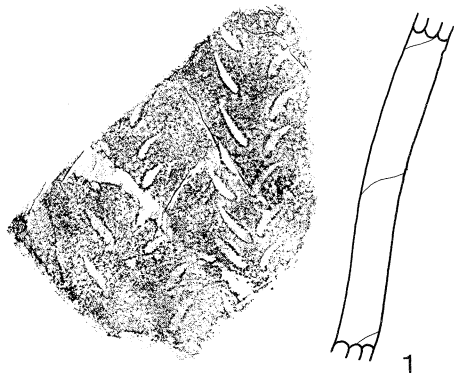
第25図　TR-18 (1/60) 1号～4号土坑 (1/20) 出土遺物 (1/2)

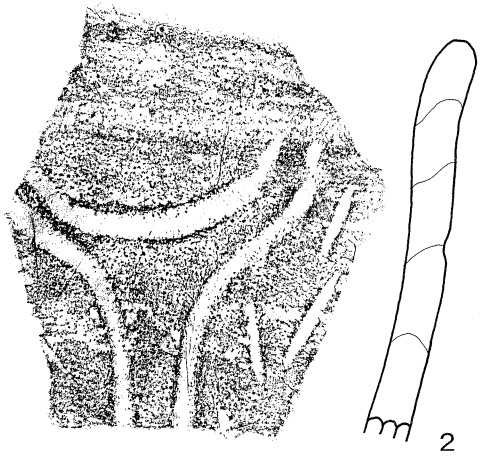


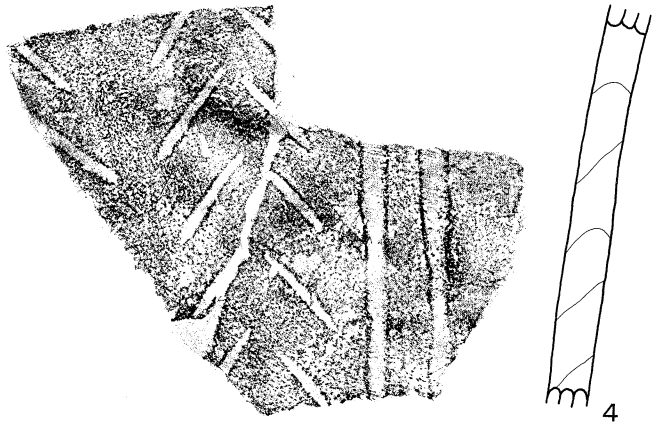



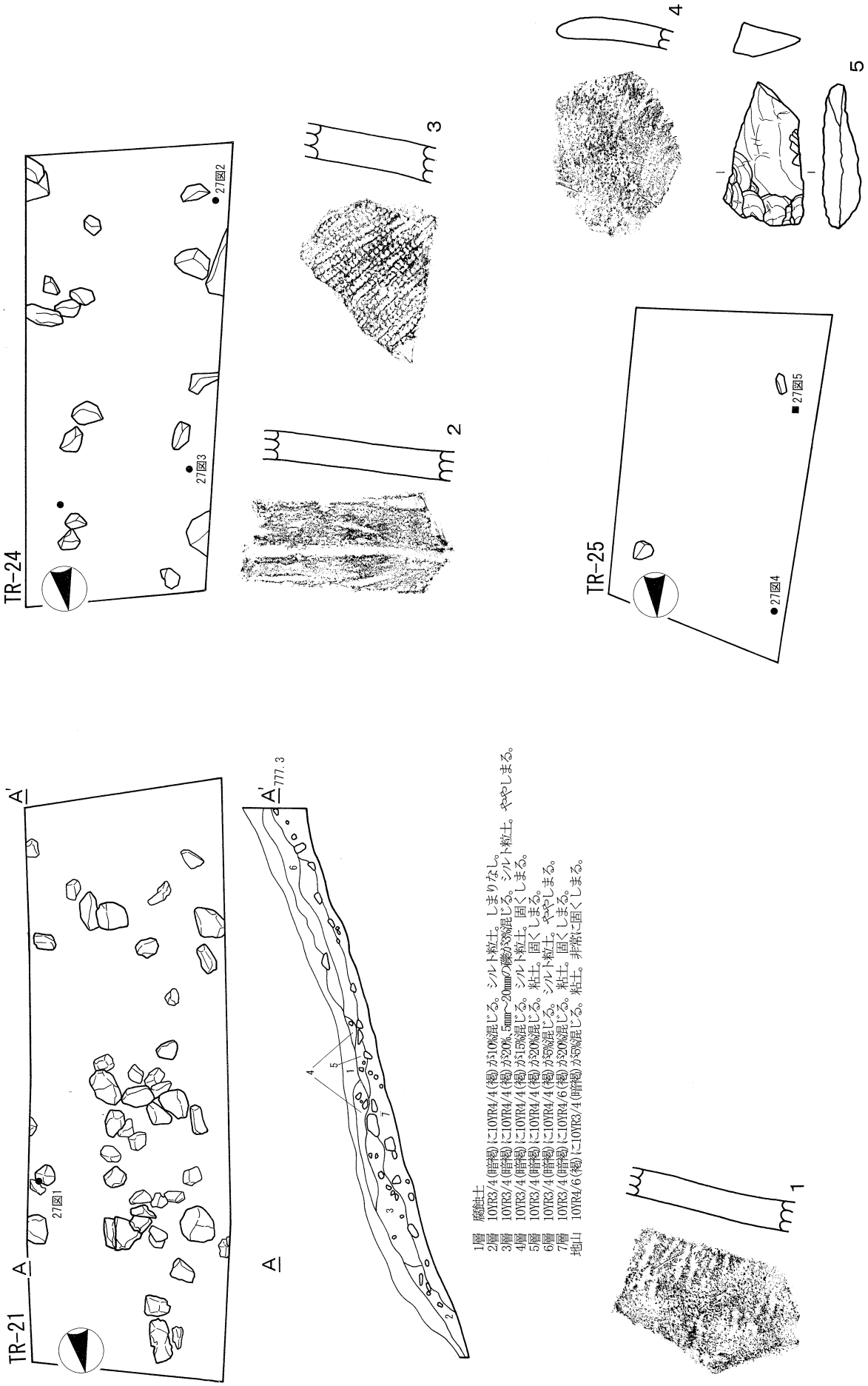

1層　腐蝕土
2層　10YR4/4(褐)に7.5YR3/3(暗褐)が20%混じる。シルト粒土。非常に固くしまる。(最近の道の跡?)
3層　7.5YR2/3(極暗褐)に、7.5YR4/6(褐)が10%混じる。シルト粒土。ややしまる。
4層　10YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。
5層　10YR3/4(暗褐)に7.5YR2/3(極暗褐)が10%、こぶし大の礫が混じる。シルト粒土。ややしまる。
6層　7.5YR2/3(極暗褐)に10YR3/4(暗褐)が30%、こぶし大の礫が混じる。シルト粒土。固くしまる。
7層　7.5YR3/4(暗褐)に10YR3/4(暗褐)が10%、こぶし大の礫が混じる。シルト粒土。固くしまる。
8層　7.5YR3/4(暗褐)に7.5YR4/6(褐)が5%混じる。シルト粒土。しまる。
9層　10YR3/4(暗褐)に10YR4/4(褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
10層　10YR3/4(暗褐)に10YR2/3(暗褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
地山A　7.5YR2/3(極暗褐)に7.5YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。
地山B　10YR4/4(褐)に10YR3/4(暗褐)が30%混じる。シルト粒土。しまる。



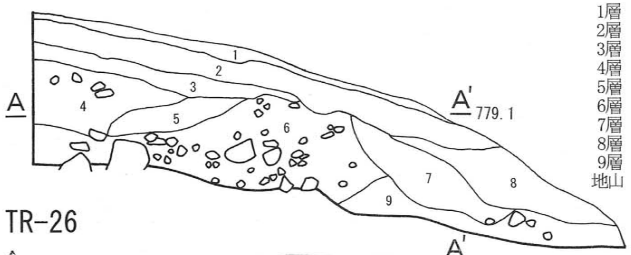




第26図　TR-20（1/60）出土遺物（1/2）

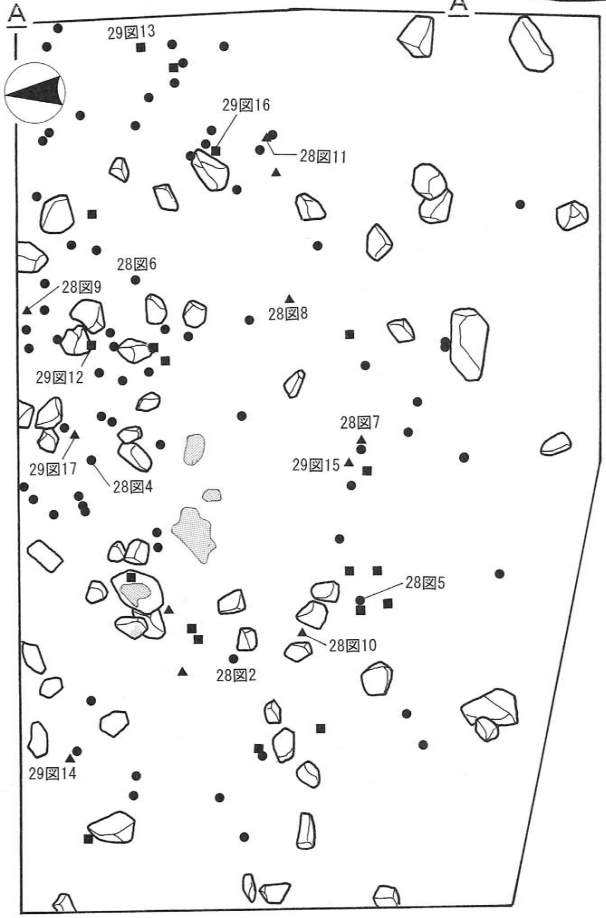


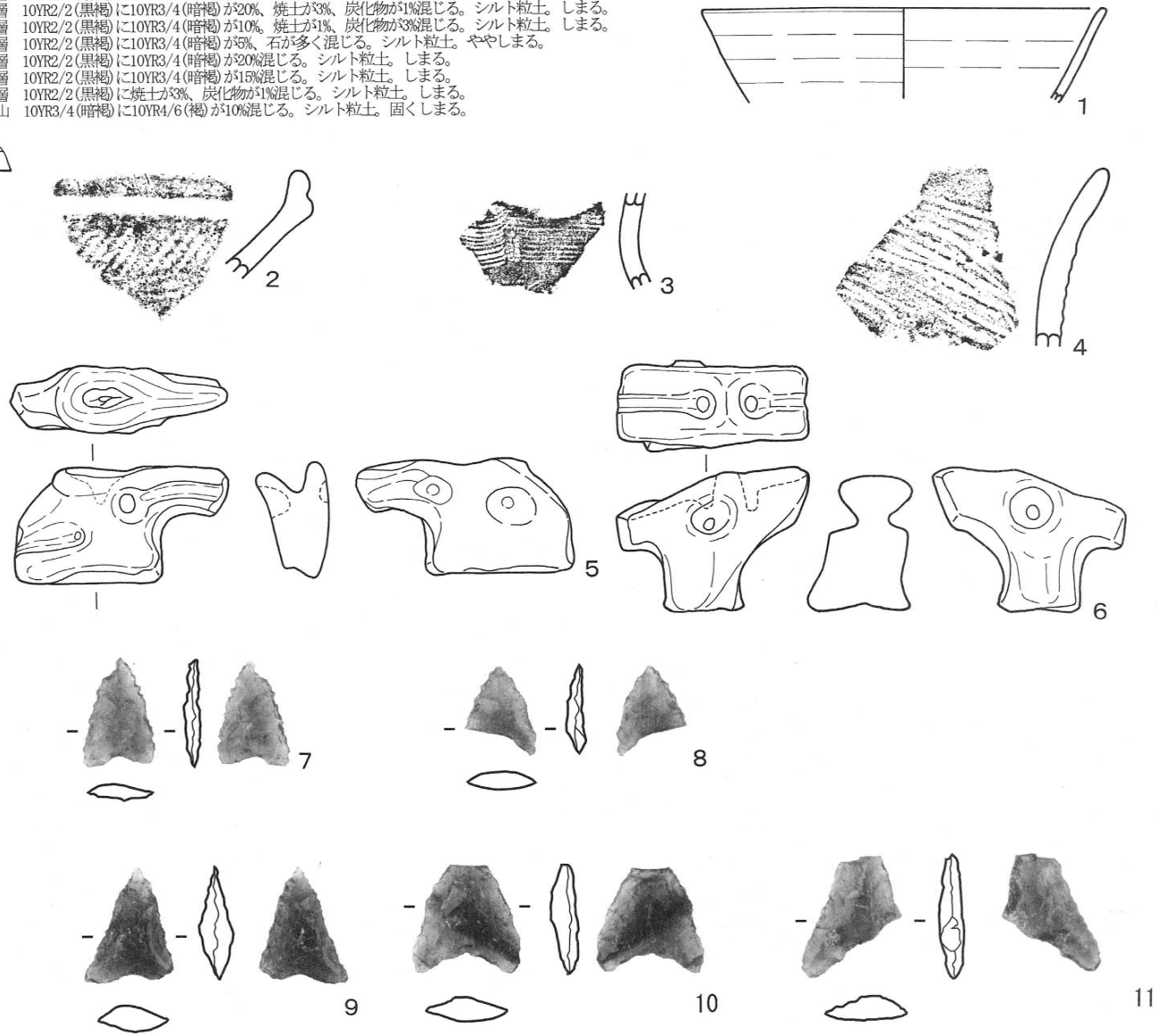

第 27 図　TR-21、TR-24、TR-25（1/60）出土遺物（1/2）

1層　腐蝕土
2層　10YR3/4(暗褐)に10YR2/2(黒褐)が5%、炭化物が2%混じる。シルト粒土。しまる。
3層　10YR3/4(暗褐)に10YR2/2(黒褐)が20%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる。
4層　10YR2/2(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が20%、焼土が3%、炭化物が1%混じる。シルト粒土。しまる。
5層　10YR2/2(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が10%、焼土が1%、炭化物が3%混じる。シルト粒土。しまる。
6層　10YR2/2(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が5%、石が多く混じる。シルト粒土。ややしまる。
7層　10YR2/2(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が20%混じる。シルト粒土。しまる。
8層　10YR2/2(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が15%混じる。シルト粒土。しまる。
9層　10YR2/2(黒褐)に焼土が3%、炭化物が1%混じる。シルト粒土。しまる。
地山　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%混じる。シルト粒土。固くしまる。

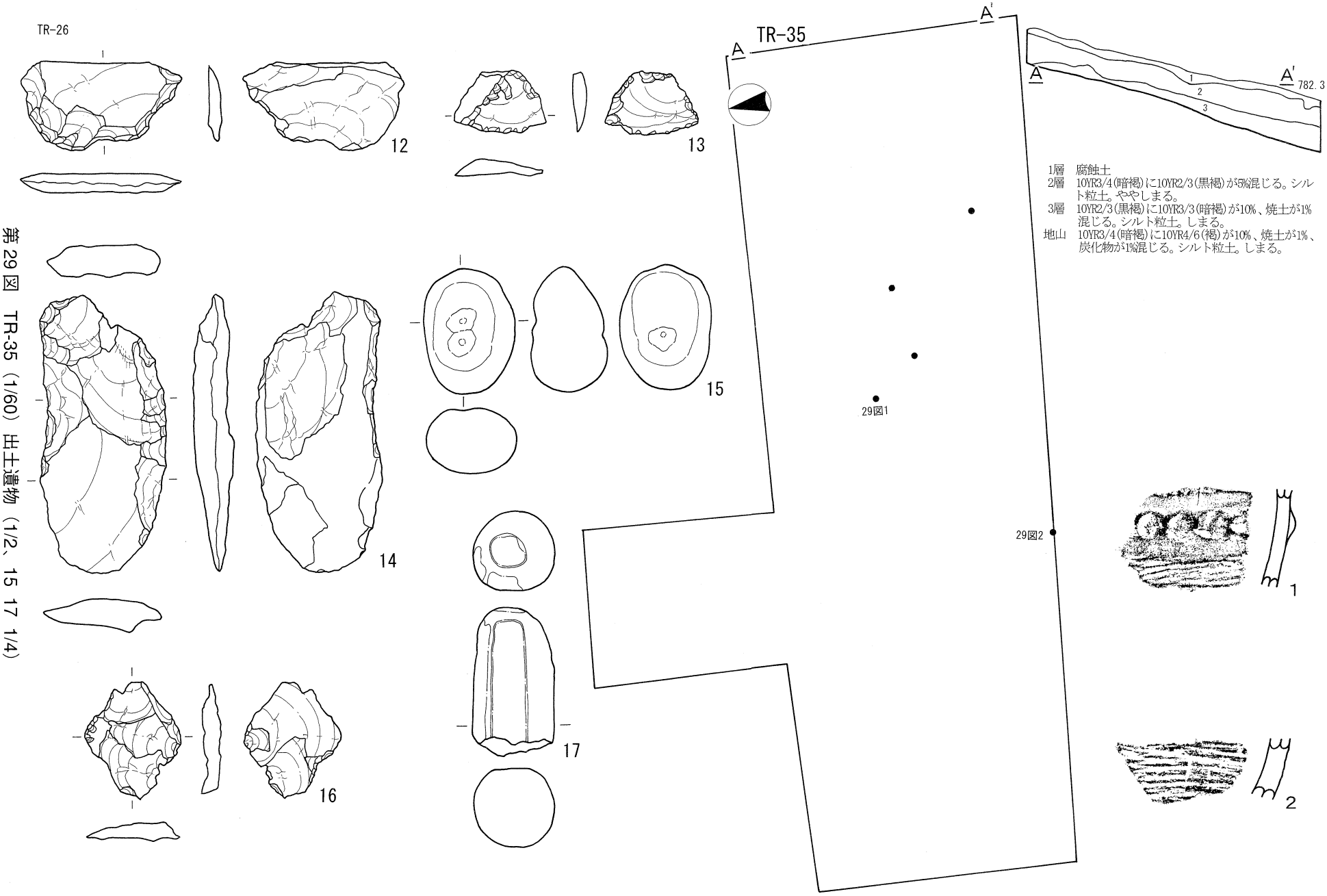



TR-26

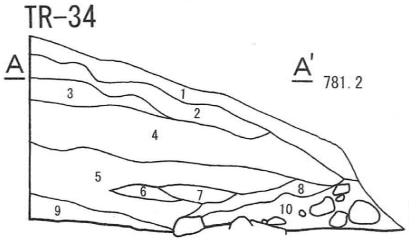


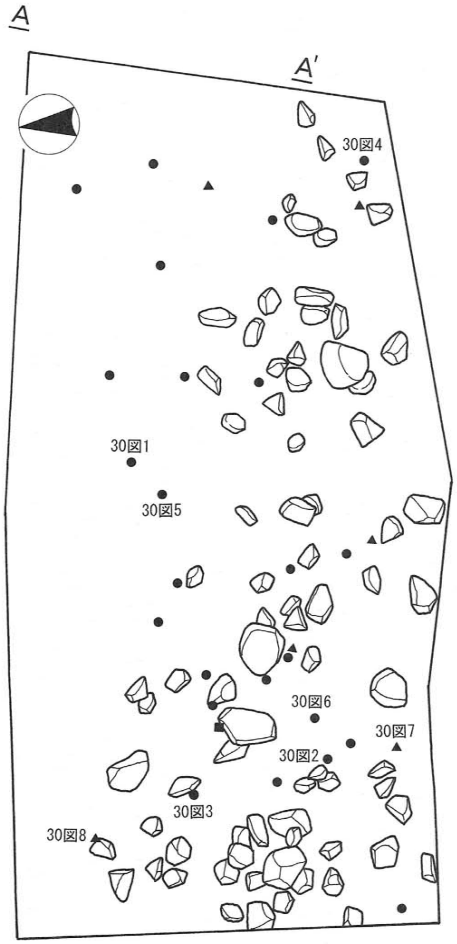

第28図　TR-26 (1/60) 出土遺物 (1/2、7～11 1/1)

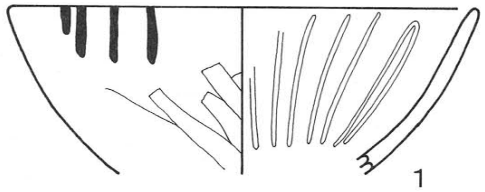


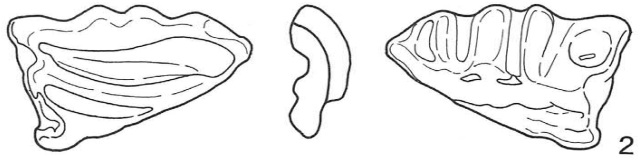

第29図　TR-35（1/60）出土遺物（1/2、15 17 1/4）

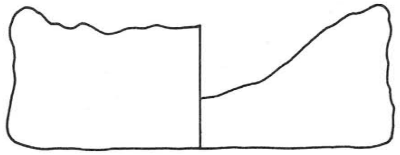


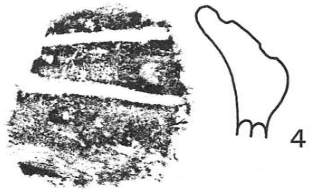

1層　腐蝕土
2層　10YR4/4(褐)。シルト粒土。しまる。
3層　10YR4/4(褐)に10YR2/3(黒褐)が5%混じる。シルト粒土。しまる。
4層　10YR2/3(黒褐)に10YR4/4(褐)が2～15mmのブロックで10%混じる。シルト粒土。しまる。
5層　10YR2/3(黒褐)に10YR4/4(褐)が粒子で20%、10YR3/3(暗褐)が10%、焼土が1%、炭化物が3%混じる。シルト粒土。しまる。
6層　10YR2/2(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が5%、焼土が1%、炭化物が5%混じる。シルト粒土。しまる。
7層　10YR2/2(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が10%混じる。シルト粒土。しまる。
8層　10YR2/2(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が5%、焼土が2%、炭化物が5%混じる。シルト粒土。しまる。
9層　10YR2/2(黒褐)。シルト粒土。しまる。
10層　10YR2/2(黒褐)に石が多く混じる。シルト粒土。しまる。
地山　10YR3/4(暗褐)に10YR4/6(褐)が10%混じる。シルト粒土。固くしまる。

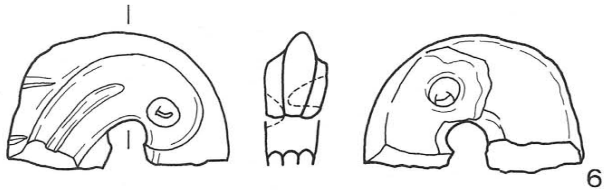


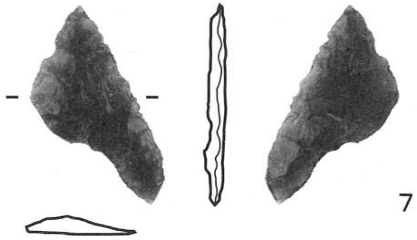



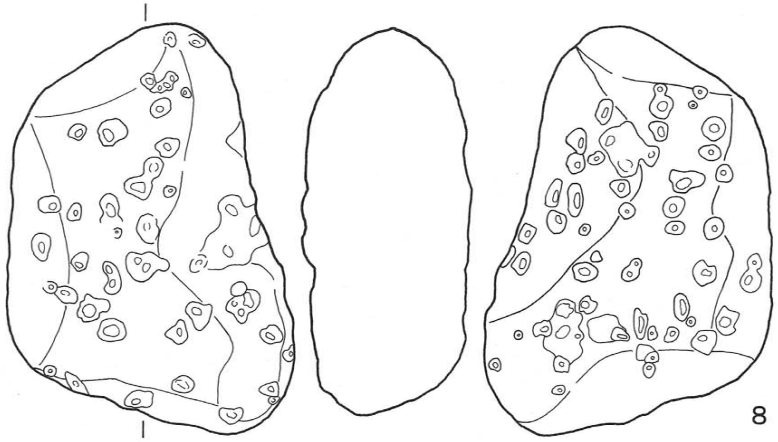



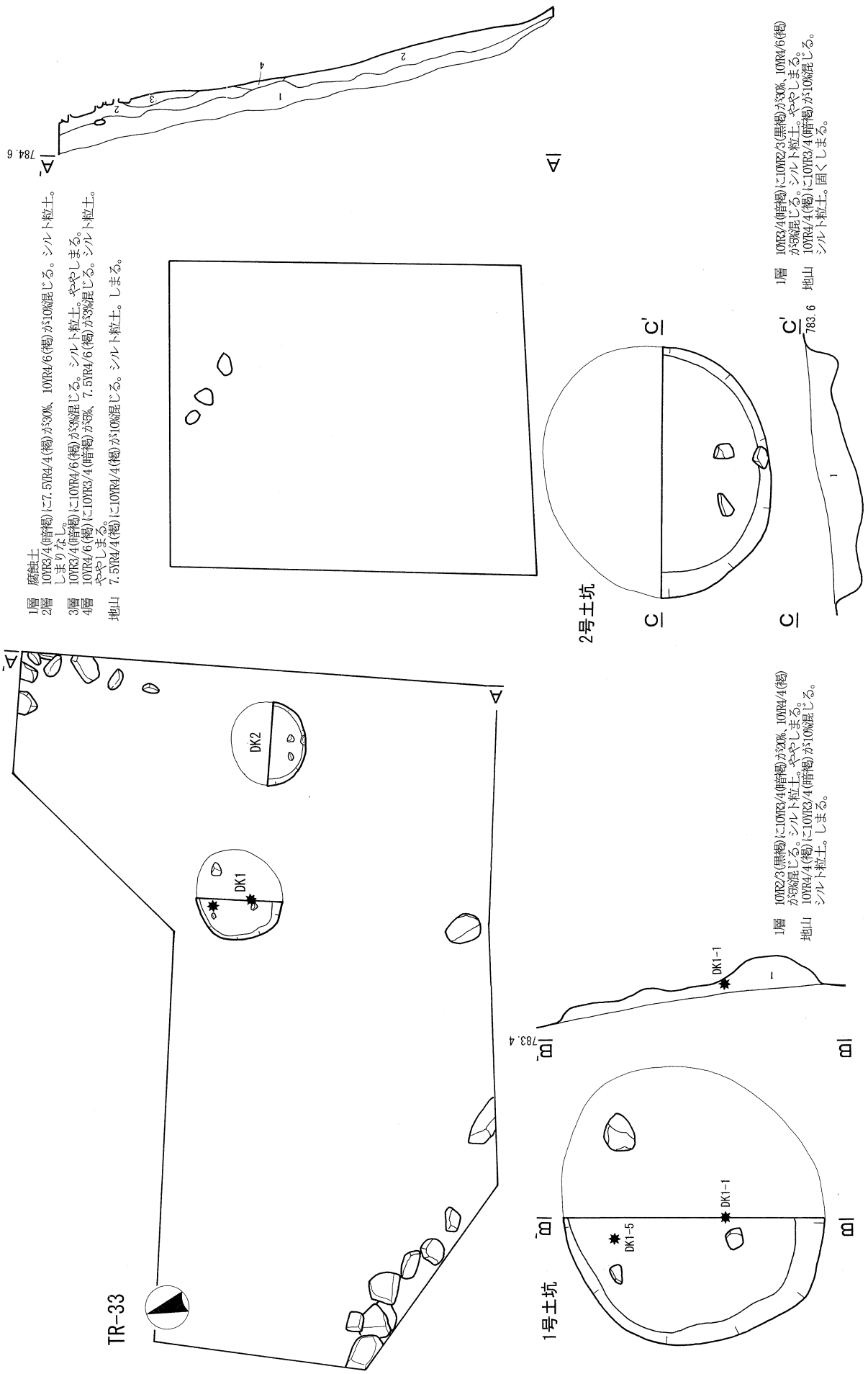





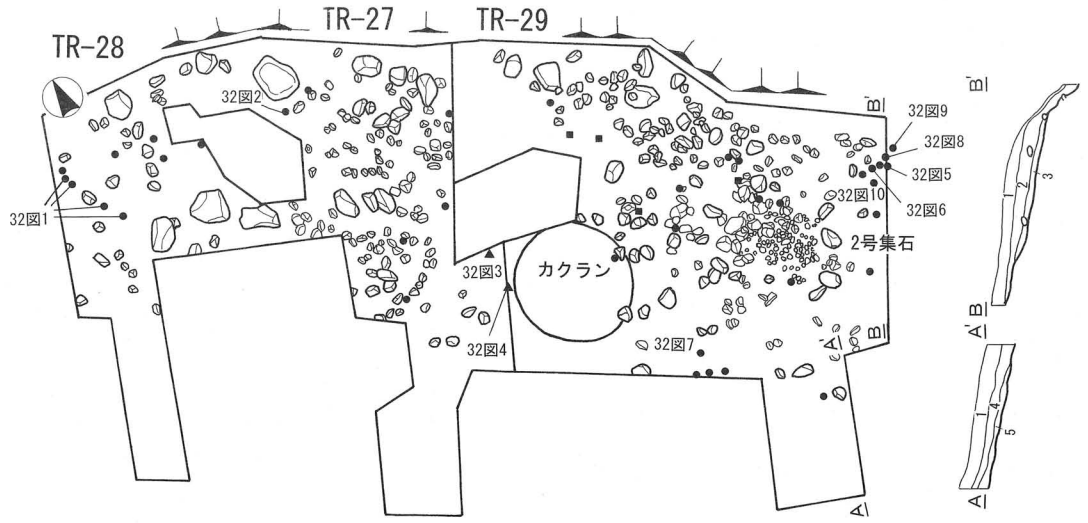



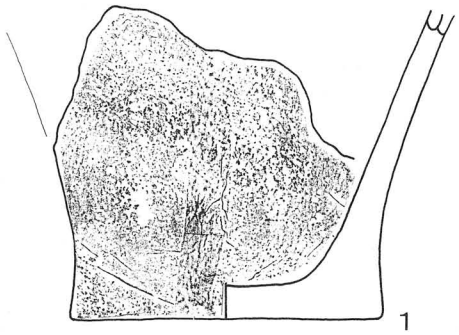

第30図　TR-34（1/60）出土遺物（1/2、7 1/1 8 1/4）

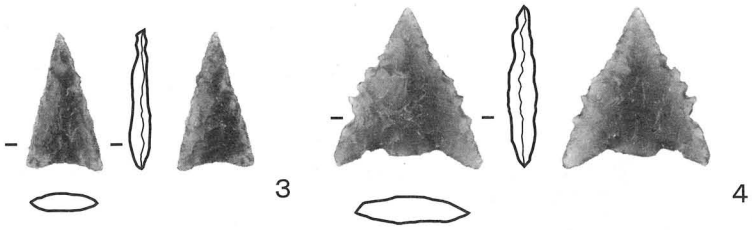


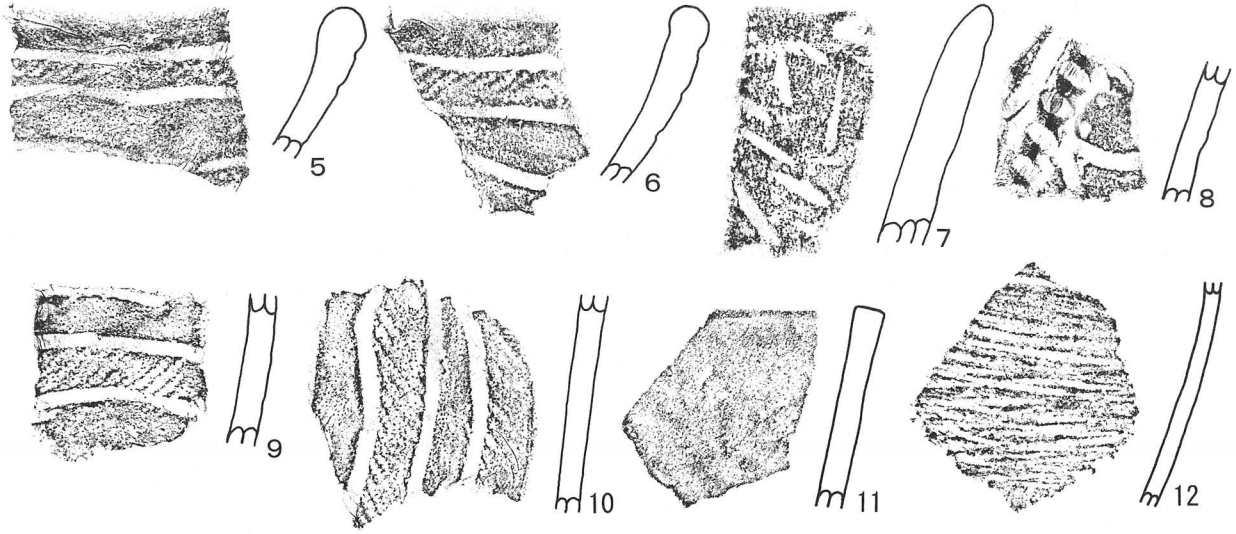

第31図　TR-33（1/60）1号、2号土坑（1/20）



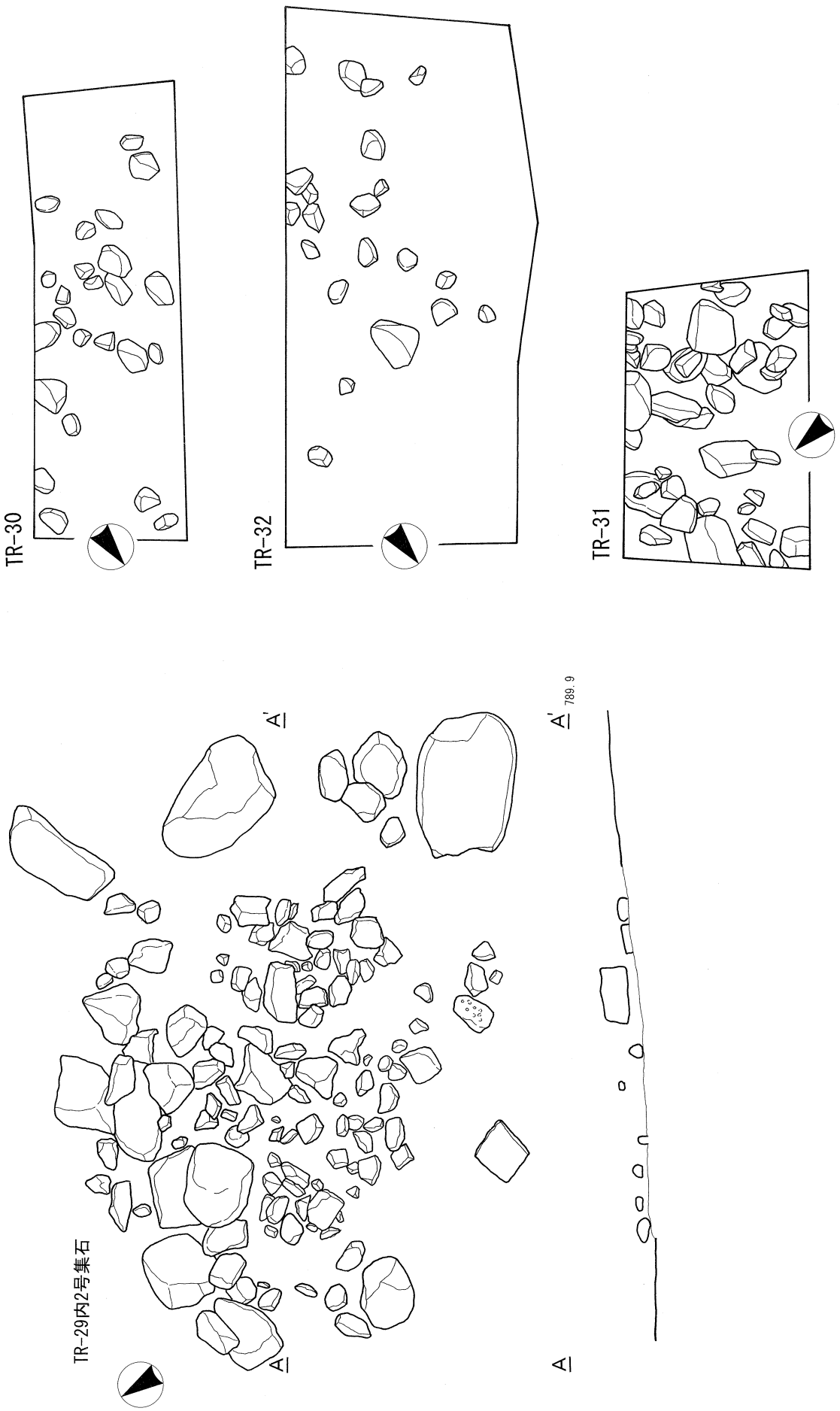

1層　腐蝕土
2層　10YR2/3(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が10%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる。
3層　10YR3/4(暗褐)に10YR2/3(黒褐)が20%、炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる。
4層　10YR2/3(黒褐)に10YR3/4(暗褐)が20%混じる。シルト粒土。ややしまる。
5層　10YR4/6(褐)に10YR3/4(暗褐)が10%混じる。粘土。しまる。
地山　10YR3/4(暗褐)に炭化物が1%、焼土が1%混じる。シルト粒土。しまる。



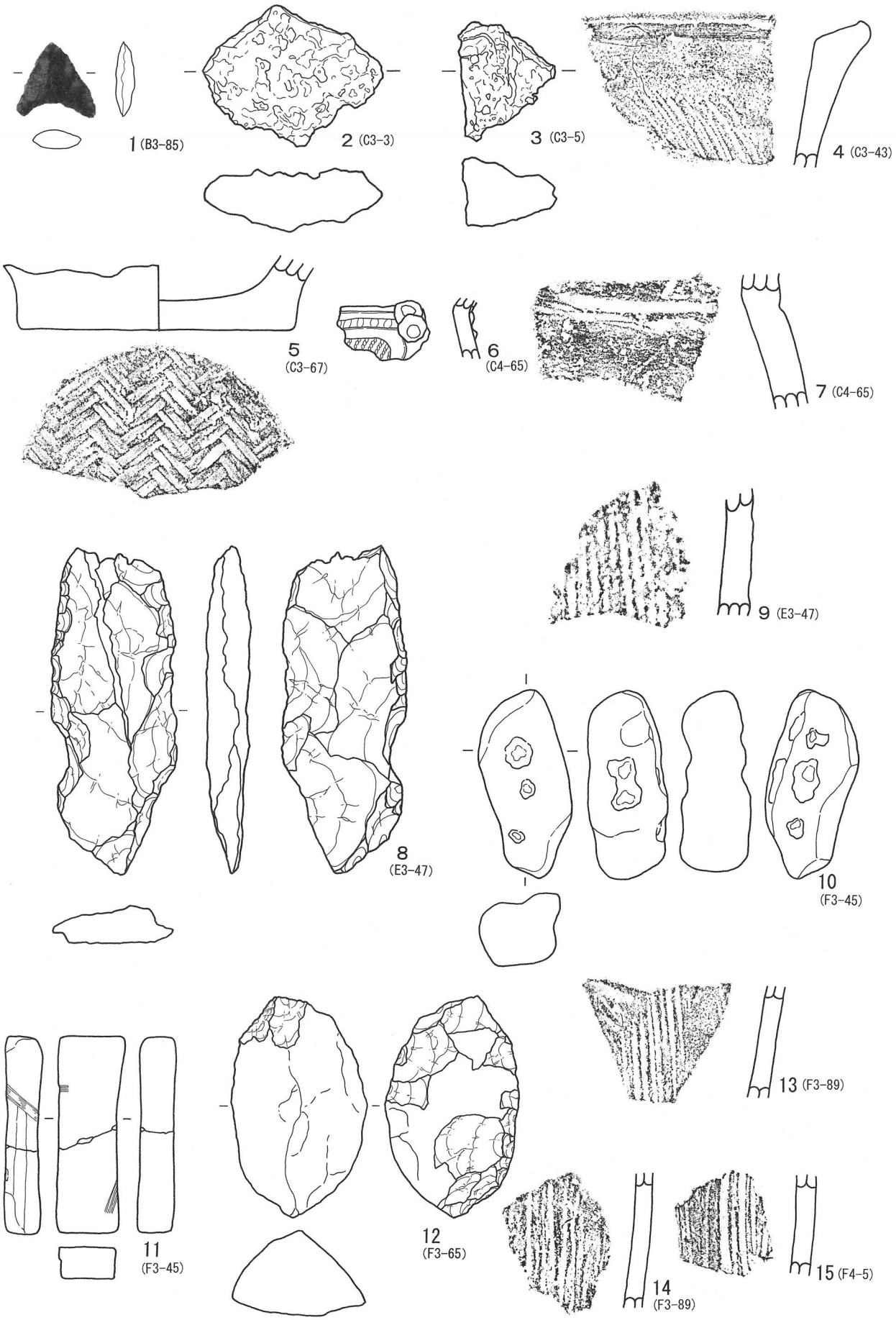



第32図　TR-27、TR-28、TR-29（1/160）出土遺物（1/2、3 4 1/1）




第33図　2号集石（1/20）TR-30、TR-32、TR-31（1/60）




第34図　試掘坑の出土遺物（1/2 1/1 9～11 1/4）

梅之木遺跡遠景（背景は茅ヶ岳・金ヶ岳）

梅之木遺跡俯瞰写真（平成 15 年 11 月撮影）

92 号住居

92 号住居

111 号住居

111 号住居柱穴付近の土偶出土状況

55 号住居

55 号住居柱穴

14 号住居

18 号住居

18 号住居

18 号住居出入口の立石

156 号住居

156 号住居

156 号住居

10 号住居

集落北側の斜面

6 号試掘溝

2 号試掘溝

3 号試掘溝

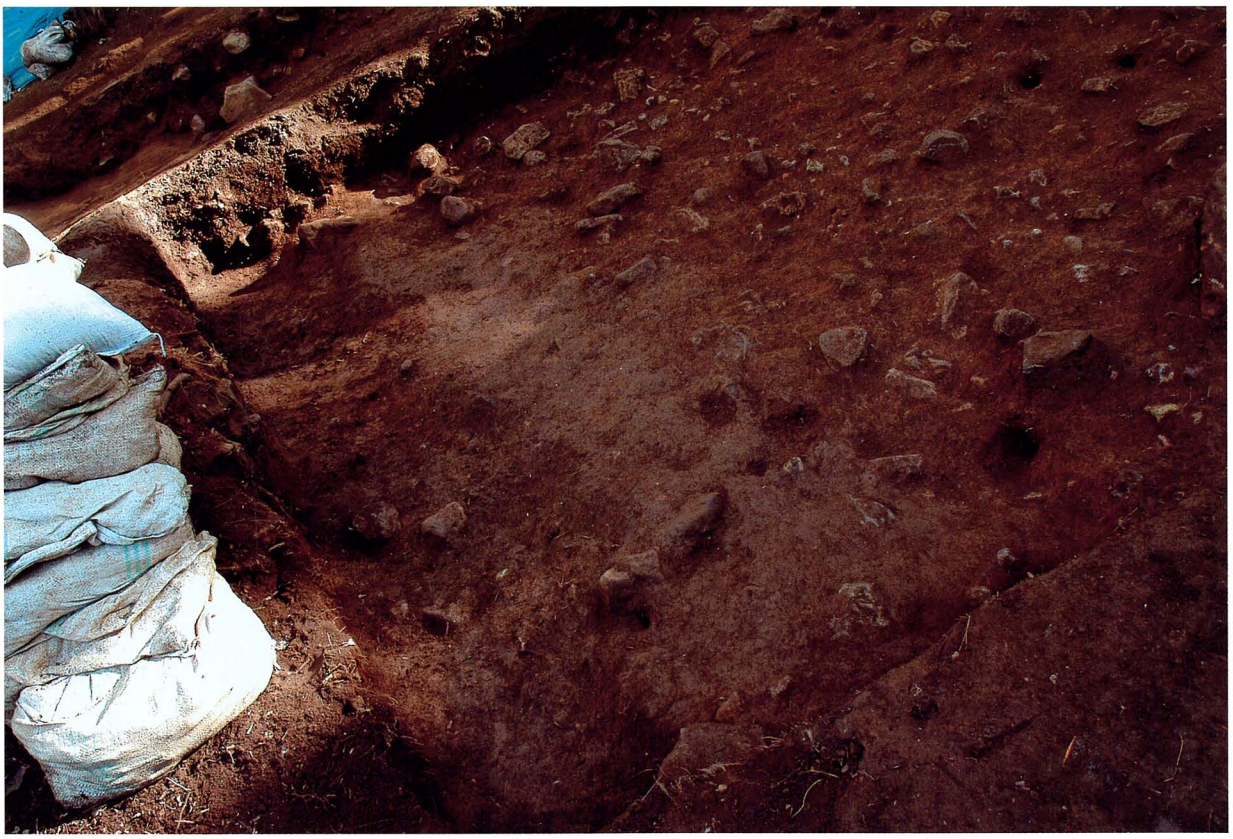
4 号試掘溝

5 号試掘溝

6 号試掘溝

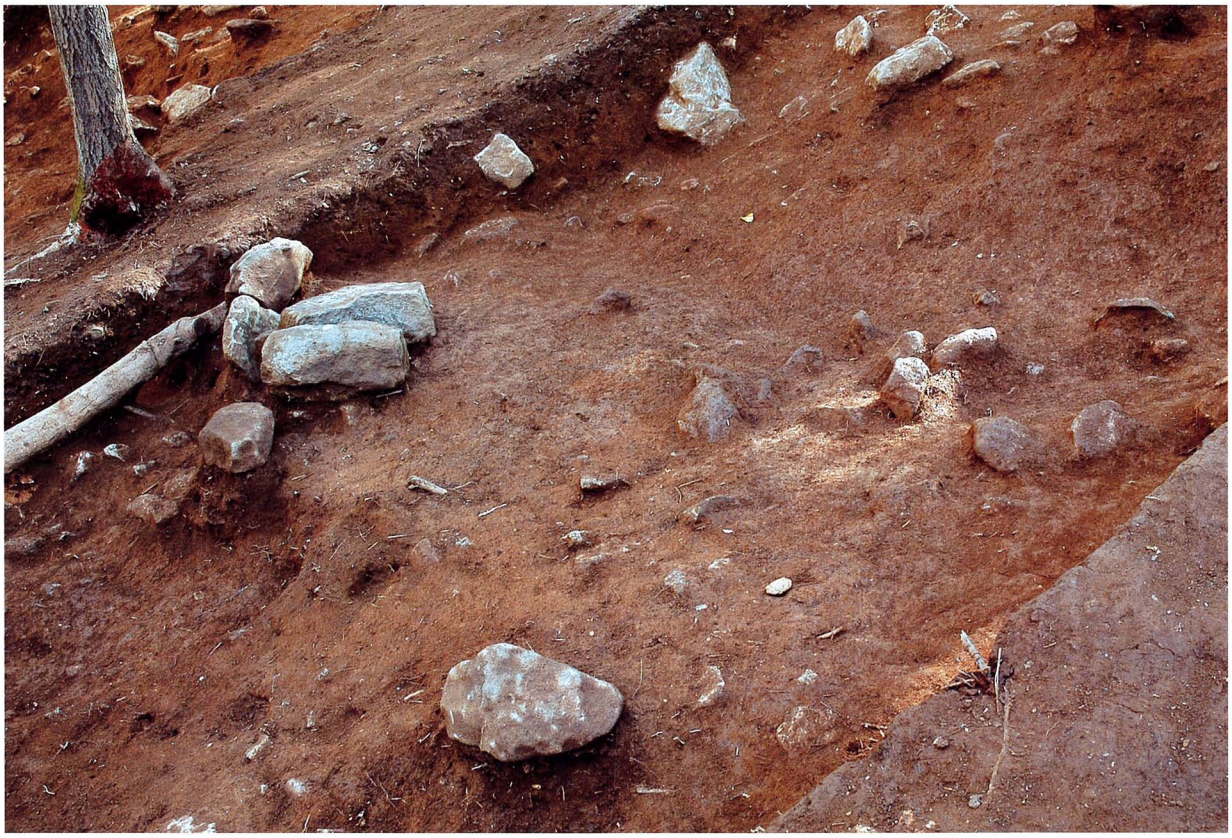
7 号試掘溝

9 号試掘溝



10 号試掘溝

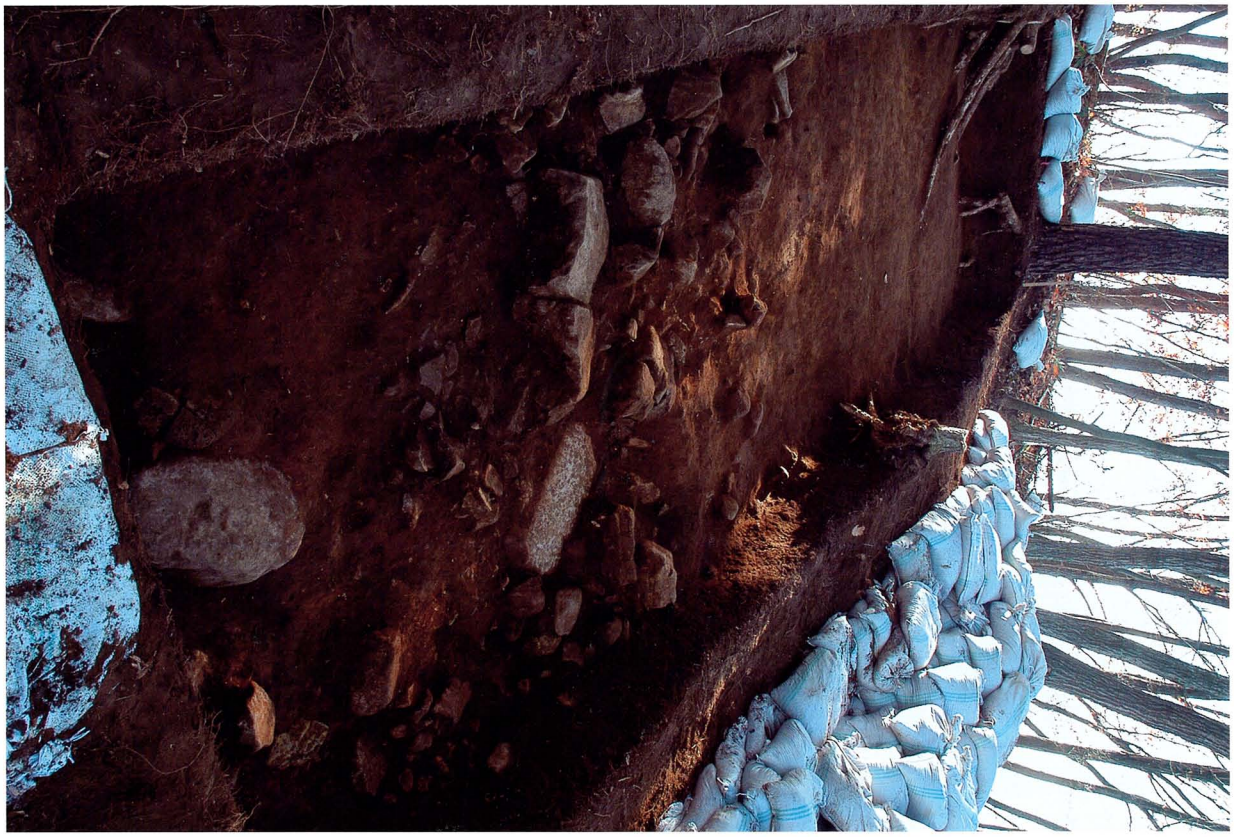
10 号試掘溝



11 号試掘溝

12 号試掘溝

22 号試掘溝



23 号試掘溝

湯沢川の現況

湯沢川の現況（現在は涸沢になっている）

13 号試掘溝

13 号試掘溝の集石土坑

14 号試掘溝

14 号試掘溝の焼土跡

15 号試掘溝

15 号試掘溝遺物出土状況

16 号試掘溝

17 号試掘溝

18 号試掘溝

18 号試掘溝の土坑検出状況

19 号試掘溝

19 号試掘溝の敷石遺構

20 号試掘溝

21 号試掘溝

24 号試掘溝

25 号試掘溝

26 号試掘溝

27・28・29 号試掘溝

29 号試掘溝の集石

30 号試掘溝

31 号試掘溝

32 号試掘溝

33 号試掘溝

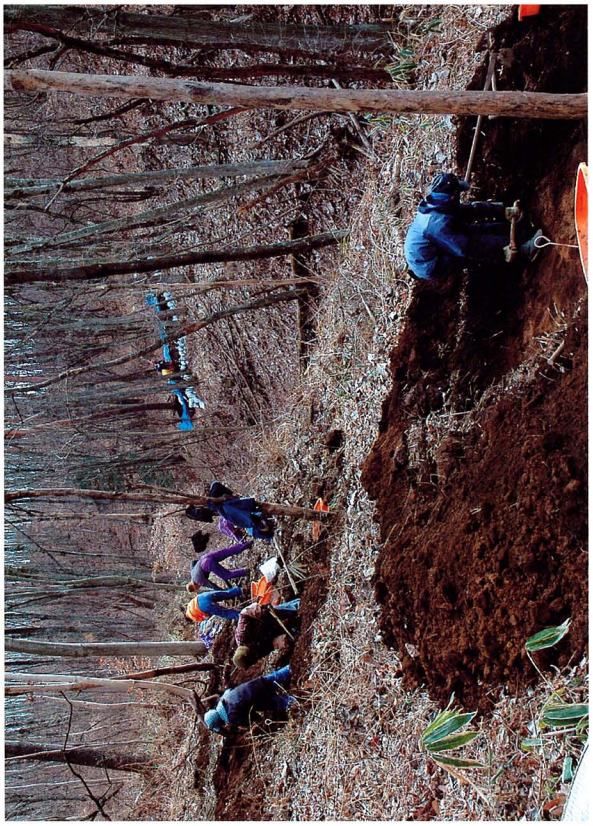
33 号試掘溝の土坑検出状況

34 号試掘溝

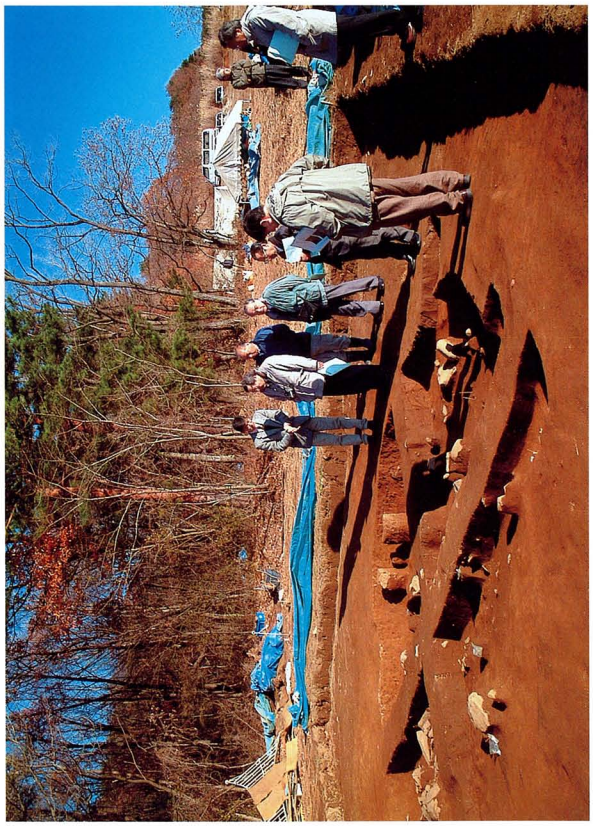
34 号試掘溝

35 号試掘溝

平安時代の住居跡を確認した試掘坑



作業風景



調査指導委員会の現地視察

平成 17 年度調査の見学会

梅之木遺跡からみた八ヶ岳

梅之木遺跡からみた南アルプスの山並み

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | うめのきいせき　ご |
| 書名 | 梅之木遺跡Ⅴ |
| 副題 | 縄文時代中期の集落遺跡の平成17年度確認調査概要報告書 |
| シリーズ名 | 北杜市埋蔵文化財調査報告　第12集 |
| 著者 | 佐野　隆 |
| 発行機関 | 北杜市教育委員会 |
| 編集機関 | 北杜市教育委員会 |
| 所在地／電話 | 〒408-0188　山梨県北杜市須玉町大豆生田961-1　　0551（42）1373 |
| 印刷所 | 須玉印刷 |
| 発行日 | 平成18年（2006）3月31日 |

| | |
|---|---|
| ふりがな | やまなしけんほくとしあけのちょうあさおあざうめのき |
| 所在地 | 山梨県北杜市明野町浅尾字梅之木 |
| 位置 | 北緯35°47′23″　東経138°27′45″ |
| 調査原因 | 重要遺跡確認緊急調査 |
| 調査期間 | 平成17年4月1日～平成18年3月31日 |
| 調査機関 | 北杜市教育委員会生涯学習課文化財担当 |
| 調査面積 | 2573㎡ |
| 時期 | 縄文時代（中期曽利式期） |
| 主な遺構 | 縄文時代の竪穴住居7軒　道路状遺構　川岸の敷石遺構　集石土坑 |
| 主な遺物 | 縄文土器・石器 |
| 特記事項 | 住居150軒程度から構成される曽利式期の環状集落遺跡 |

北杜市埋蔵文化財調査報告 第12集
梅之木遺跡Ⅴ
縄文時代中期の集落遺跡の平成17年度確認調査概要報告書

2006年3月25日　印刷
2006年3月31日　発行

発　行　北杜市教育委員会
山梨県北杜市須玉町大豆生田961-1
TEL (0551) 42-1373

印　刷　須玉印刷
山梨県北杜市須玉町若神子3931
TEL (0551) 42-2346